
反転・遊戯 - リバース・ゲーム -

神代家家長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

反転・遊戯 - リバース・ゲーム -

【Nコード】

N5465H

【作者名】

神代家家長

【あらすじ】

特殊な腕輪を拾い『反転支配』の能力を身に付けた少年は、本人の意思に関わらず戦いの場に巻き込まれていく。

第一章（前書き）

制限文字数に上限が無かったので一気に第一章を載せて見ました。
なので少し長すぎて読みづらいかもしれません。

第一章

唐突な話だが反転現象と言う物をご存知だろうか？

自慢じゃないが俺は今日、この時まで全く知らなかったし興味もなかった。が、気付いたら俺は文字通り全てが反転してしまった。

何が反転したかつて？

そりゃ色々な物が反転したのだが一番大きく反転した物と言えば性別だった。

事の起こりは学校帰り。

予兆などと言う物は全く無く、本当に前触れも無い話。普段通学路として利用している道端で綺麗な腕輪を拾ったのだ。

特に興味も沸かなかったが無視するほど無関心でもなかった為、拾って眺めた。

そして腕輪なのだからと試しに腕に通して装着してみた瞬間。

「・・・」

気付いたら女になっていた。

「なんだ、こりゃ？」

着ていた学校指定のブレザーは勿論男子用だった筈なのに、気付いたら女子用の制服を身に包み、燃えるような真っ赤な長い髪をなびかせて『アタシ』は暫し考えた。

不思議と自分が女である事に違和感を覚えない。

自然と女言葉にしては乱暴な『アタシ』という一人称が自然と出

た。

「こいつのせいかな？」

アタシは腕に装着した腕輪を試しに外して 外し 外。

「外れね？」

外見的に外すのに余裕がある幅がある筈なのに何故か外れない。というか外そうとすると頭の中に外してはいけないと言う信号が走る感じ。まあ実際腕を振って遠心力をかけても外れないのだから物理的にも外れないのだろうが。

外すのが無理だと分かったので今度はコンクリートの塀に腕輪を押し付けて拾った石で思い切り腕輪を殴りつける。

「痛つて〜！」

腕輪を狙って殴りつけたが、その衝撃が腕に伝わって凄く痛い。しかも腕輪には罅一つ入っていなかった。

「破壊も無理と」

こうなるともう一生女のままという選択肢が頭を掠めるが まあ 少々冷静になってみよう。

何故アタシが女になってしまったのか？

恐らくはこの腕輪が原因と見て間違いないだろう。が、それは原因であつて理由にはならない。腕輪を装着するだけで性転換していったのでは世の中の腕輪愛好者は皆大変な事になっている。

つまり、この腕輪は何らかの特殊な腕輪であり、この腕輪を装着する事で何らかの作用が発動してアタシは女になったと。

何らかの作用。

「リバーエンベラー 反転支配」

その単語は自然と口から出てきた。

「リバーエンベラー 反転支配

アタシが触れるもの限定で反転現象を起こす能力。

この場合、反転したのはアタシの『男』と言う性別。そして『男物の服装』。アタシ自身は『女』になり服は『男物の制服』であった服は『女物の制服』に反転した。

「・・・」

試しに下着なども確認してみたが、そちらも女物になっている。上下ともだ。

そして、アタシはそれに対して全く違和感を持っていない。つまり反転したのは性別だけではなく、『男と言う意識』が『女と言う意識』に反転した証。

「ふむ」

何故こんな事が分かってしまうのかは分からない。が、分かっってしまうのだから仕方が無い。

「いや、ちよつと待てよ？」

アタシはこんなにポジティブな思考をしていたらどうか？どちらかと言うと男のアタシは目立たないというか悲観的な男であり特徴の無い奴だった筈。

それが女になった途端妙にウキウキしてはしゃぎまわりたい気分。性別の違い だけじゃない。これも反転されているのだろう。

恐らく『無個性』だった男の特徴が反転されて『個性的』な特徴が形成されたのだ。

これはこれでもとても良い気分なのだが。

「このまま家に帰ったらヤバイよな」

なんと言っても女になってしまっているのだ。このまま家に帰っても本人と認識してもらえるかどうかも怪しい。

どうにかして元の男に戻らないといけないが どうやって？

一度反転出来たのだから、もう一度くらい反転すれば。

「^{リバース}反転・・・^{オフ}解除」

ふと思いついた単語を口にした途端、俺は男に戻っていた。

「ふむ」

家に帰って自室に籠ってから拾った腕輪と自分の頭の中にある『ある筈の無い知識』を整理してみる。

まず能力名は『^{リバースコンペラー}反転支配』。俺が触れた物に限定で『反転現象』を起こす能力。そして反転現象を解除したキーワード。

「いや。これは違うか」

反転現象を解除するのに必要なのは『キーワード』を発音する事ではなく思い描く事だ。つまり声に出さなくても、それをイメージ出来れば解除は可能。

ここまでは良い。

問題なのはどうかやって反転現象を発動させるか？

「ふむ」

問題にはしてみたが、実はこれも思ったほど難しくはなさそうだが、試しに部屋に転がっていたゴムボールを手に持ってちよつとだけイメージして

リバースタート
「反転開始」

能力を発動させる。どういう原理なのか今一分からないが手に持っていたゴムボールは反転して裏表が裏返る。穴も空いていないのに裏返るのだからこの力は本物だ。

ここまでも良い。

発動と解除。それが制御出来る力だという事が分かったし一応一段落だ。

だから次の問題に移る。

次の問題

「何でこんな現象が起こりえたのか？」

腕輪を拾ったから では納得出来ない。そもそもこの腕輪を拾ったら誰にでも使える能力と言う事なのか？それとも俺は選ばれたのか？

「は。馬鹿らしい」

何処の誰が俺なんかを選ぶと言うんだ？客観的どころか主観的に考えても俺よりマシな奴など世間にゴロゴロしている。つまり腕輪を拾った奴なら誰でもこの力を使えるようになっていたと考えるべきだ。

「いや、待てよ？」

そこまで短絡的に考えて良い物が自分の思考にストップをかける。

確かにこの腕輪を拾った奴には『能力』が目覚める。

ここまででは良い。

だが俺の頭の中に刻み込まれた『リバースンペラー反転支配』が誰にでも発現するのかもしれないと正直首をかしげる。そう腕輪によって刻み込まれたと思われる俺の中の知識が言っているのだ。

「発現する能力には個人差がある」

つまり俺ではなく他の誰かがこの腕輪を拾って装着していても『リバースンペラー反転支配』として発現した可能性は限りなくゼロに近い。全くゼロではないと思うが皆無と言っても過言ではないだろう。

「兎に角、色々試してみるか」

能力の基本的な使い方は頭の中に刻み込まれているが細かい事は何も分からないのが実情だ。兎に角この能力で何が出来るとかの可能な限り試してみよう。

しかし、その前に前提条件として。

「この事は他言無用。他人には絶対に悟らせてはいけない」

頭の中に刻まれた知識 ではなく俺の今まで生きてきた経験がそれを提案する。出る杭は打たれる。兎に角目立ったり特出した物を持っていれば良い事などある訳が無い。

考えるまでもなく、この事は内密にするべきだと俺の大事な部分が囁いていた。

幸いな事に俺には考えるとと言う時間だけはたっぷりであった。

朝起きて家を出てから学校に到着するまでの間、授業中、放課後学校から家に帰るまでの間、帰ってから寝るまでの間。その全てが考える事の出来る有効時間だ。

自慢じゃないが俺は優等生などと言う物から縁が無い。だから授業中に何をしようか注意などされないし、友達も碌に居ないの
で休み時間も声も掛けられないし、家に帰っても親は俺に無関心な

のでやはり俺の考え事を邪魔する奴は居ない。

世間的に見て俺は居ても居なくても良い奴。存在感の薄いクラスに一人は居るつまらない奴、というポジションだ。まあ要するに俺は社交的とは掛け離れた男だった。

俺のようなポジションに居る奴は良く『周りの奴らが悪い』と言った被害妄想を持つらしいが俺には特に無い。俺が孤立しているのは俺に度胸と積極性が無いからだ。それを俺はちゃんと理解し自覚している。

まあ自覚していてそれを改善していないのだから俺も大して変わらないか。

俺は本当に能力を隠しに隠した。

何が起こるか分からないのだから学校は勿論、野外では一切能力の使用を厳禁とした。使うのは唯一家の自室で厳重に鍵を閉めて行った。

結果、幾つか分かった事がある。

まずは反転の制限時間だ。

反転は俺が触れている間は特に制限時間は無いが俺が手を離れた瞬間から制限時間が発生するのが分かった。俺が手を離してから約一分間。その間は反転は俺が自分の意思で解除しない限りは持続し続ける。

俺が最初に女に反転した時随分長く反転していられたのは俺自身が能力の対象になっていたからだ。

次に制限回数　と言うよりは消耗具合と言った方が正しいかもしれない。反転は一度使う事に俺の中の何かを消耗して発動しているらしい。だから一定回数使用すると使用不可能になる。

この消耗具合には使う現象によって差があり、俺自身の作用する物　女になつたり性格を変えたりする事は一番消耗が少なくて済む。反対に俺以外の物へ能力を使用すると消耗が大きく、更に対象の大きさによっても消耗具合が違ふ事が分かった。平たく言うと小

さい物ほど消耗が小さく、大きい物ほど消耗が大きい。

次が一番大事なのだが、この『リバーズエンペラー反転支配』で一体何が出来るのか？更に言うところ処まで出来るのか？

それを考えるに当たって一番に考えなければならぬ事は 攻撃力の確保だろう。

この腕輪がどうして俺の元へ来る事になったのかは不明だが、俺でさえ能力が発現したのだから他の誰かが拾っていても発現したに違いない。もっと言うところ腕輪がこれ一つとは限らないのではないか？という話だ。

もし俺以外にも腕輪を手に入れた奴が居て、更にもし俺に何らかの理由で敵対する奴が現れた時の為に何か対処法を持っていた方が良だろう。

あくまで用心の為だが早いうちに何かを考えておく必要がある。

何日かを費やし考え、更に何日かを費やし俺は一つの武器の製作に成功していた。

「リバーズエッチ反転凶刃」

仕組みはそれほど難しくは無く、長さ20センチほどの鉄の棒に細長い鎖をくくりつけただけの武器だ。一見すれば鞭のように見えるかもしれない。

この武器の利点はなんとと言っても持ち運びが便利な上に服の中に隠しておけると言う事だった。取り出しやすいように服の方にもいくらか改良を施したが、兎に角武器を一つ完成させる事に成功した。そして俺の携帯電話に奇妙なメールが届いたのはその夜の事だった。

数日前に届いたメールは他人が見れば酷く不可解な物だった。

まず初めに差出人の名前は『監視者』。そして内容は祝福を告げ

るものだった。

『おめでとう。この度貴方は『能力者』としての勝ち抜き戦に参加する資格を得ました』

普通ならこの時点で削除しているようなキチガイな内容のメールだが勿論俺は削除などしなかった。

『『参加資格』は腕輪をしている事。そして勝者への『賞品』は敗者の腕輪を奪い取る権限が与えられます』

腕輪？何の話かと読み進めると俺が今つけている腕輪は『L V 1』仕様の腕輪であり、敗者の腕輪を奪う事によって『L V』を上げる事が出来るらしい。

そして肝心の勝ち抜き戦のルールは。

「正気か？」

『能力者』同士、1対1の対決。判定方法は どちらかが死亡する事。無論死んだ方が負けになる。

一応辞退する事も許されるが、その場合は決められた対戦相手に腕輪を明渡す必要がある。

「『能力者』から腕輪を取る方法は『能力者』が死亡している事」

結局の所、殺される訳だ。

問答無用のデスマッチ。

逃げると言う選択肢も一応あるが これだけの事をしでかし、しかも俺のところへ正確にメールを寄越した相手だ。逃げ切れるとは思えない。

要するに死にたくなければ戦って勝つしかないと言う事だ。

俺の対戦日時はメールの届いた3日後に決められた。

決められた日時から10日後。午前零時に町外れの港付近の倉庫街に来られたし。

「・・・」

時間は限られていたが俺は限られた時間の中で日常を崩さない程度に目一杯考えて、目一杯対策を練った。

こうなってしまうは『リバースエッチ反転凶刃』だけでは心許ない。

俺は新たな攻撃手段と攻撃構想を可能な限り脳みそを振り絞って考えた。考えたが全てを物にするには余りにも時間が少なすぎた。

決戦当日、午後11時32分。

俺は重い足取りで件の港へと到着した。少々早めの時間なので誰も居ないかと思っていたが予想に反して二人の人物が俺を待ち構えていた。

「ようこそ。腕輪の能力者さん」

一人は妙齢の女性で妙に艶のある声で俺を出迎えてくれた。思うにこの人が『監視者』側の人間なのかもしれない。つまり。 。
「なんだ。随分ひよろいガキだな」

もう一人の長身で黒い服を纏ったこの男が俺の対戦相手という事か？

「さて。まだ決戦まで時間がありますから少し位なら質問を受け付けますよ。答えられる範囲での話ですが」

「えっと・・・」

とりあえず確認したい事。 。

「貴女が『監視者』と思つて良いのですか？」

「ええ。その通りです。もつとも今回の場合は審判や説明係と言つたほうが正しいかもしれませぬ」

クスリと笑う女性。殺し合いが始まる直前だというのに笑える精神を疑う。

「それじゃ決戦が始まったら介入とかは・・・」

「一切しません。私は少し離れた位置から状況と戦いを見守るだけです」

「そうですか」

これで一応口約束だけだが2対1の状況に追い込まれる心配は無くなった訳だ。まあ用心に越した事は無いけれど。

「俺からも質問だ。決戦といったが当然能力の使用は可能なんだろう」

うな？」

「勿論です」

「じゃあ、この周囲に被害が出た場合は？」

「問題ありません。この周囲の建物は全て我々の傘下の物ですし人払いも既に完了しています」

対戦相手の質問を聞いてから俺もふと思いついた。

「あの。この決戦って記録されたり他の人達に情報が流されたりするんですか？」

「いいえ。この戦いを見守るのは私だけであり、私は一切の情報を外部に公開する事はありません」

「そうですか」

それなら一安心。

それからの時間、俺は対戦相手の男に睨まれているようで妙に落ち着かなかった。ソワソワして緊張で胃が痛くなってくる。

「さて。決戦5分前になりました。開戦前にお二方の名前をお伺いします」

「名前？」

「本名である必要はありません。というか本名を名乗られても困りますので・・・そうですね『能力名』とでもいえば良いでしょうか？腕輪を装着した者には自然と頭の中に能力名が記憶されている筈なのでそれを教えて貰えれば十分です」

「言ったら能力がばれるんじゃないか？」

「略称でも構いません」

「ふん。なら俺は『ブリッド』で良い」

『ブリッド』か。名前からして遠距離攻撃を得意とするタイプかも知れない。

「貴方は？」

「俺は・・・」

頭の中で少しだけ考えて

「リバース」

それだけを名乗った。

『監視者』の女性は俺達を見渡せる所へと移動し、徐々に開始時間が迫ってくる。

「あの」

だから残り二分を切った所で俺はオズオズと話し掛けていた。

「あ？」

「これ、どうしても戦わなくちゃいけないんでしょうか？」

「おめーもメール見たんだろ？勝って生き残るか、負けて死ぬかしかねーんだよ」

「でも、負けたからって殺す事は・・・」

「は？何甘い事言ってるんだ。んな事言ったら死ぬただけだぜ。それに殺さなきゃ腕輪は取れねーんだ。殺さなきゃ勝負がつかないだろうが」

「でも、もつと何か・・・殺さなくても良いような方法があるかも」

「は！それを後一分以内に見つけ出すってのか？どんな奇跡だよ」

「・・・」

胃が痛い。手足が震える。気持ちが悪い。

「それじゃ、どうしても戦うんですか？」

「他に手があるなら考えてやるぜ。お前がそんな都合のいい方法を考えて思いつけばの話だがな」

「わかりました」

俺はぎゅつと目を瞑り歯を噛み締める。やるしかないんだと自分の言い聞かせながら。

そして次に目を開くと同時に 開始の合図にしては安っぽい音が鳴り響いていた。

「行くぜ！」

対戦相手 ブリッドが律儀に宣言するとポケットから何かを取り出して指の間に挟んで構える。そしてそれを。

「うわ！」

指で弾いて高速で弾き出してきた！

間一髪、横に飛んでやり過ごせた物の撃ち出して来た物が何であるかさえも視認出来なかった。本当にギリギリ。ブリッドの名前を聞いて弾丸を連想していなければ今のでお陀仏だったに違いない。

「ふん。なんだ、そのへっぴり腰は！ドンドン行くぜ！」

「わ！ちよ！」

俺は撃ち出される何かからジグザグに逃げながら倉庫の隙間へと飛び込む。

「ち！」

障害物に視界を遮られるのを嫌ったのか舌打ちが聞こえてくる。続いて俺を追跡するように追いかけてくる足跡が聞こえてくる。

俺は手早く立ち上がると深呼吸を繰り返す。狭い路地へと入り込んでくるブリッドを見据えて待ち構えた。

「と。何だ、もっと奥に逃げ込んだと思ったが腰でも抜けたか？」
言いつつも弾丸となる物。コインを指で挟んで俺に向けて狙いを定めてくる。

俺はそれを無視するように右手で左肩を掴むようにして。

「Reverse Start」
リバース スタート

右手を右下へと振りぬいた。

「な！？」

目の前の男。ブリッドとかいったか？その男がこちらを見て驚愕して口を空けて呆然としている。まったく持って間抜け面だ。こんなのが一回戦の相手とは。アタシも舐められた物だ！

「は！青臭い坊やが、お姉さんに見とれでもしたのかい？」

赤く、燃えるような長い髪を掻き揚げてアタシは腰の辺りに手を当てて柄を握り、一気に引き釣り出す！

「リバースエッジ
反転凶刃！」

服の中に巻き付けるように仕込まれていた鎖の鞭が解き放たれア

タシはその鎖で地面をビシヤリと叩き付けた。

「お、お前、さっきのガキか？」

「坊やにガキ呼ばわりされる謂れはないね。ま、どうせ今夜でお別れた。たっぷり可愛がつてあげるよ」

唇を　男の時は色気のない実用オナリーのリップしか塗っていなかった物が反転して真つ赤な口紅が塗られた唇をペロリと舐める。
「喰らいな！」

アタシは鎖を男に向かって振りかざす。正直鞭など使った事もないのでまともな振り方ではない。が、アタシが『触れている反転凶刃』はアタシの反転影響をモロに受ける。本来なら振り上げたなら後ろに垂れてしまう筈の鎖が所々で反転してピンと棒のように直立する。それを振り下ろした！

「げー！」

「ち。往生際の悪い」

間一髪避けられてしまったが『反転凶刃』の命中した倉庫の壁は普通じゃあり得ない決れ方で割けている。能力により物理的に命中した場所が反転して捻り切られたのだ。ハッキリ言って、この『反転凶刃』は文字通り凶刃だ。触れた箇所を硬度や形状に係なく捻り切る。もし人間に当たったら間違いない痛いや済まない。

「このー！」

仕組みなど分からないだろうが危険だと察知したのかブリッドは距離を取るようにして指に挟んだコインをアタシに打ち出そうとして来る。

「させるか！」

狭い倉庫の隙間だ。アタシは一気に間合いを詰めると鎖を横薙ぎに振りぬいた！横の倉庫の壁が歪に決れて破片がブリッドに向かって飛んでいく。

「痛っ！」

肩に命中。血を流すが残念ながら間接の間接には反転は適応されない。傷を負わせるには成功したが仕留めるには到らなかった。

「ちい！」

「待ちやがれ！」

傷を負ったブリッドは背中を向けて逃げ出す。アタシは勿論逃がさない。ブリッドを追って倉庫の隙間を飛び出し

「無用心な奴」

ブリッドの弾丸がアタシの胸に直撃した。

監視者達

「あらら。終わりかしら？意外とあっけなかったわね」

あの坊や リバースはなかなか面白い能力の使い方をしていたのだが無策に突っ込んだせいでブリッドの弾丸を喰らって倒れてしまった。

「ブリッドの勝利みたいね」

「どうかな？」

私に反論したのは私のような『見張り』ではなく『観戦者』である彼。

「ブリッドの弾丸は音速を超えるわ。それが命中した以上、生きているとは思えないけど？」

「計算に齟齬が出ただけだ。別に命中してはいないよ」

「計算？」

「リバース。確かに面白い能力の使い方だな」

彼の面白いと私の言う面白いにはいささか違いがあるようだ。私は男である事実を反転して女に変えて戦う事を面白いと言ったのだが。

「ふむ。時間もある事だし少し解説しようか。彼女・・・いや、彼かな？彼は戦闘を開始した時から色々な物を反転していたのだが。男を女に反転させたのもその一つだ」

「まあ、いつの間にか服とかも反転しているわね」

最初は男の服だったのにいつの間にか女の服になっている。

「そんな事は些細な事だ。ところで彼らが戦う前に話をしていた事は知っているね？」

「ええ。随分甘つちよろい事を言っていたみたいだけど」

「彼の場合、それで良いのさ。いや、そうでなくてはならないというべきかな？」

「どういう意味？」

「つまり、彼はそれすらも反転してしまっているんだよ。彼は戦闘開始前の戦意はゼロだった。戦意ゼロを反転するとどうなると思う？」

「・・・」

「そう。言ってみれば敵意の塊になる。同じように殺す事を迷っていれば、迷っているほど反転した時に迷いが消える。なかなかドライな少年だね」

まあ、そっちの方の解説はわかったのだが。

「それがブリッドの弾丸を回避するのに何の役に立つの？」

「回避などしていないよ。僕は命中していないと言っただけだ」

「？」

「まあ、見ていてごらん」

「ち！」

アタシは少し焦げてしまった服の胸元を払いながら立ち上がる。

折角のチャンスだったと言っのに計算がずれてしまった。

「何！？」

見えないほどの速度の弾丸を喰らったというのに平然と立ち上がったアタシを見てブリッドが驚愕を漏らす。更にアタシを警戒したのか距離を開けて絶対に『リバースエッチ反転凶刃』の届かない位置まで下がって再びコインを指に挟みアタシに狙いをつける。

「次は外さん！」

どうやらアタシが防弾チョッキか何かを着込んでいても思っ
たらしい。とんだ勘違いだが好都合 『今度は外さん』はアタシ
の台詞だ！

「死ね !!!」

言葉と同時に複数の弾丸が放たれる。それに対してアタシは両手
を広げて待ち構え 血飛沫が舞い散る。

「が・・・え？」

複数の弾丸に打ち抜かれた『ブリッドの身体』から。

「な、何で？」

その言葉を最後にブリッドはうつ伏せに倒れ、ピクリとも動かな
くなった。

「ふう〜」

自信はあったが勝利出来た事にアタシは安堵の息を吐く。

「お見事」

そのアタシにパチパチと拍手を送りながら『監視者』の女が近付
いてきた。一体何処から見てやがったのか。

「まさかベクトル制御とはね。速度、回転、衝撃まで綺麗に狙撃者
に返しちゃうなんていい計算してるじゃない」

「・・・」

「そんな怖い顔しなくても誰にも言わないわよ。ね？」

「ふん」

アタシは顔を背けてブリッドの死体へと近寄り、その腕から腕輪
をもぎ取った。

「これを着ければ良いのか？」

「ああ。その説明がまだだったわね。その腕輪を今貴方がつけてい
るのと同じ腕に装着すると『Lv2』の能力を手に入れる事が出来
るわ」

「他に何か使い道がありそうな口調だな」

「ええ。ここからが肝心なので良く聞いてね。勝者は奪い取った敗
者の腕輪だけではなく能力も奪う事が出来るの。ただし、それを使

いたいなら今つけている腕輪とは違う場所に装着する必要がある上に……」

「Lvは1のままって事か？」

「そういう事」

つまり腕輪を複数重ねる事によってLvが上がり、バラけて装着する事により複数の能力を手に入れられる訳か。

「どうするか良く考えてね。腕輪は逃げないから」

「ふん」

アタシは迷う事無く右腕に リバーエンペラー 『反転支配Lv2』を選んだ。

「あら、潔い。そんなに簡単に決めちゃって良かったの？」

「『監視者』を自称する奴に答える義務があるのか？」

「それもそうね」

女はアツサリ引き下がって挨拶もなく去っていった。

「ふう〜」

とりあえず一回戦突破だ。

第一章（後書き）

反転・遊戯 - リバース・ゲーム - はまだまだ続きます。

第二章

腕輪を奪い取った時は暗くて気付かなかったがLv2になった腕輪は色が僅かに変っていた。

白だった腕輪が少し青色に変っていたのだ。

「それにしても・・・疲れた」

当然と言えば当然だがベクトル計算なんて簡単な物ではない。当然、俺が瞬時に計算式を出して回答を出さなんて無理に決まっている。

だから計算したのは決戦の前。猶予である10日間をフルに使って可能な限り想定されるベクトル計算を行い頭に叩き込んで決戦に望んだのだ。

ちなみに、この絶対防御的なベクトル操作の名前は「リバースコア反転結界」と命名した。理論上あらゆる攻撃を跳ね返す事が可能な訳だが勿論弱点もある。というか弱点だらけだ。

まず継続時間が恐ろしく短い。Lv1の時点で最大継続時間が2秒ちよいと言っただからブリッドを前にタイミングを計るのに物凄く冷や冷やした。一応Lv2になった事で継続時間が延びたが、それでも5秒ジャストと言った所だ。

次に消耗が恐ろしく激しい。何度か試してみたがLv1の時点では一日3回も使えば弾切れだ。Lv2でも5回といったところ。

そして相手との距離、相手の攻撃速度をある程度予想して適する計算式を当てはめて展開しなくてはならないので恐ろしく面倒臭い。というか相手が長距離用の能力だからよかった物の接近戦の能力者だったらかなりピンチだった。そこまで咄嗟に展開出来るほど速く計算式を展開出来ないからだ。

「兎に角、勝ててよかった」

携帯電話には既に次の対戦相手と対戦日時が記されていたが、今

日くらいは情眼を貪っても良い筈だった。

「ご丁寧にも2回戦の相手の情報は顔写真付だった。それに略称の能力名が記されている。能力名は『インゴット』。」

「延べ棒？」

「ちよつと想像がつかない能力だ。」

「まあ、相手の情報が少しでも分かるのはありがたいのだが、逆に言えばこちらの情報も相手に渡っていると見て間違いない。恐らく俺の顔写真と『リバーズ』の略称名が。」

状況が変化したのは学校の休み時間に対戦相手の顔写真をボンヤリ眺めていた時の事だ。次の対戦相手は女性。しかも結構可愛いのだ。まあ、殺し合いをしなくてはならないのだから男だ女だ言っ
ていられないのだが。

「あれ？それって楠留美じゃないのか？」

「思わぬ情報は俺の背後から勝手に手に入った。」

見ればクラスメイトの男子の一人が俺の後ろに回りこんで勝手に携帯に写る顔写真を覗き見ていた。本来なら注意するか怒るところなのだが。

「知っているのか？」

「ああ。駅を挟んだ向こう側にある女子高の生徒でな、これが可愛くてうちの学校の奴にも結構ファンが居るんだぜ」

「へ〜」

「こつ言う時、自分が目立たない存在である事に感謝する。相手の情報は簡単に手に入ったがこちらの情報は簡単に漏れないからだ。」

件のクラスメイトに更に情報を求め、楠留美とやらが良く出現するであろうスポットをさりげなく聞き出した。というか勝手に喋

ってくれた。

俺は早速放課後にそのスポットへと出向いてみる事にした。

無論下手な変装などして俺の事がばれては事なので下手な変装などしない。

「ふふん」

完璧に変装 否、変身して堂々と張り込む事にしたのだ。赤く燃えるような長い髪がちょっと目立つがこの際贅沢は言っていない。

ちなみにベクトル計算と違って女性化の方はその気になれば一日中でも変身してられる。自分に対する反転は異常に効率が良いのだ。

件の場所 ちよい上品過ぎる喫茶店で一番安いコーヒーで時間を潰しながら待っていたアタシは1時間ほど粘って目標を確認する事が出来た。

友達らしき女生徒を3人ほど連れているが間違いなく『インゴット』だ。

その後インゴットとその連れの話に耳を傾けていたが本気でどうでも良い事しか喋らないのであまり参考にはならなかった。一瞬、ここで感情を反転させて敵意満載で喧嘩を売ろうかとも考えたが止めた。能力者相手に普通に喧嘩を売っても意味がないからだ。

そうこうしている内にインゴット達は帰り支度をはじめて店を出てしまったのでアタシもついでに店を出て帰る事にする。今日は収穫なし。

「なあなあ。良いじゃんかよ」
でもなかった。

少し遅れて店を出た為、状況は分からないがインゴット達はしつこいナンパに付き纏われているらしい。4人は露骨に迷惑そうな顔をしていたが男達は諦める気はないのか食い下がって『なあなあ』と何だか無性に癪に障る声をあげていた。

兎に角これはチャンスである。まさかこんな人目のあるところで

能力を使ったりはしないだろうがインゴットがどのような反応をするかで対策が練れるかもしれない。

そう思って黙って見ていたのだが。

「お。あれ見るよ、あれ」

「お」

何故かナンパ男達はアタシの方に気付いて口笛などを吹きつつ寄ってくる。ってインゴットの方から離れたら駄目だろ!?

「なあなあ。君すっげー綺麗だね。何処の子？」

「俺達と遊びに行かない？」

って。今度はアタシがナンパされてる？

「なあなあ。良いだろ？行こうぜ、丁度人数足りないと思ってたところだよ」

インゴット達を放置してアタシをナンパしてきたのかと思ったら既にインゴット達のナンパは『確保』でもした気になっていたらしい。

それにしてもどうするか？アタシとしてはインゴットの反応が見たかっただけなので下手に能力を使ったりしたくないのだが。

「なあなあ」

「なあなあ」

何だかこいつら、異様にむかつく。

女になると短気になるのか、それとも女性として不快を感じたのかわからないがアタシはもう1秒たりとも迷わなかった。と言っても能力で攻撃したりはせずに内部の心情　つまり普段から全く無い戦意を反転させた。

「やかましい!!このブタどもが!!」

『・・・』

アタシの罵声にインゴットを含む周囲の人間が凍りついた。

「このアタシが手前ら如きの相手をしてやるほど暇に見えるか!?失せるガキども!!」

「す、すみません」

何故か敬語で丁寧に頭を下げてからスゴスゴと去って行くナンパ男達。そんな態度と取られると何だかこっちが悪いみたいだ。

反転させた戦意を解除して少し納得の行かない現実と共にナンパ男達を見送っている。

「か」

「？」

「格好良い　　！！！」

背後からインゴットを含む4人がアタシを取り囲んでしまった。

結局出てきたばかりの喫茶店に出戻る形になり、アタシは無駄にコーヒー一杯分の出費を覚悟してインゴット事楠留美達に囲まれてちやほやされていた。正直、男の時なら兎も角、女の時完全に女の意識になっているので女にちやほやされても全く嬉しくないが。

それは兎も角折角の機会なので話の合間を縫ってインゴットの腕を見て話し掛ける事にした。

「それ、綺麗なブレスレットね」

「え？あ、そうですか？」

インゴットの腕に装着されていたのはアタシと同じLv2の腕輪だった。

「アタシもそういうのが欲しいな」と思っていたのよ。何処で売っていたの？」

無論、アタシの腕にも腕輪ははまっているのだが反転の能力はこういう時に便利だ。光の具合を巧妙に反転してブレスレットを上手く隠していた。

「これ友達に貰った奴なんで、何処で買ったのかはちょっと」

「そうなんだ。それじゃっぱり譲って貰う訳にはいかない？」

「ええ。すみません」

ま、そりゃそうだ。

とりあえず今日はこんな所で別れる事になった。

こちらとしても能力実験や決戦準備で忙しいので早々インゴットと邂逅する事は無いと思っていたのだが、インゴットとの再会は思ったより早くに果たされる事になった。

俺は男のまままで普通に道を歩いていた。

そこで不意に、普通にインゴットを見かけた。駅の向こう側の学校という話だったが家はこちら側にあるのかもしれない。

勿論、俺の顔写真などは持っているだろうが直接面識が無いので気付いたのは俺だけだ。そして気付いた瞬間隠れたのでインゴットにはばれなかっただろう。

今日は別にインゴットに会う予定も無かったので、このまま立ち去ろうと思っていたのだが。

「あ」

気が付いたら俺は女へと反転してインゴットの方へと駆け出していた。

「え？あれ？」

駆け寄るアタシに気付いたのかインゴットは困惑した表情を見せるが今はそんな事を言っていられない。アタシはそのままインゴットに駆け寄り。

「きゃ！」

身体全体で体当たりをするようにインゴットごと地面に滑り込んでいた。

「な、何を・・・」

直後、インゴットの背後から迫っていた10トントラックがアタシ達の直ぐ傍を走り抜けていく。そして、そのまま赤信号に突っ込んでいって横手から走ってきた自動車と激突、更にガードレールを突き破ってコンクリートの塀に突っ込んでいた。

「居眠り運転だったみたいだね」

「・・・」

その事実を遠巻きに眺めたインゴットはポカーンと口をあけて間抜け面をさらしていたが、気付くとアタシに対して頭を下げていた。

「す、すみません。私不注意で・・・」

「気にする事はないよ。あれはあっちが悪い」

「で、でも・・・あ!」

インゴットの視線を辿るとアタシの膝に辿り着き、そこからはさつきへのッドスライディングで擦りむいたのか血が滲んでいた。

「大変!血が・・・」

「良いよ。この位」

「駄目です!」

何故か頑ななインゴットに近くの公園まで連れて行かれ、水で傷口を洗われた上に丁寧に治療されてしまった。

「本当にありがとうございました!」

公園で治療を済ませベンチに座ったアタシにインゴットは両手を胸の前で握り合わせ潤んだ瞳でアタシに詰め寄ってきた。

「大した事じゃないよ」

「いいえ!いいえ!貴女は私の命の恩人です!」

そうは言うのが能力者ならあの程度の危機、自力で回避出来たのではないかと思う。

「前の時も格好良かったですけど今回は本当に感動しました!まさか身を呈して私を助けてくれるなんて!」

「大袈裟だよ」

本来は敵である筈の子を思わず助けてしまった訳だが、ここまで感謝されると悪い気はしない。

「そ、それで、助けて貰っておいておこがましいのですが・・・」
「何?」

潤んだ瞳で更にアタシに顔を近づけながらインゴットは。
「『お姉さま』って呼んでも良いですか?」

心の中で『げっ』と呟いた。インゴットってマジでこう言う奴だったのか。

「だ、駄目ですか?」

「べ、別に良いけどアタシと大して歳変らないと思うよ?」

「良いんです!私がお姉さまをお姉さまと呼びたいだけですから!」

「そ、そう」

というか既に呼んでいた。

「私の事は留美で良いですから。それでお姉さま・・・」

それからが大変だった。

インゴット事留美に懐かれて早数日。

「はあ」

俺は深い溜息を吐きながら校門を出て放課後の町をトボトボ歩いていた。留美の奴が兎に角しつこいくらい付き纏ってくるのだ。校内では考え事をする事が出来るのだが放課後は殆ど丸一日潰れてしまう為、能力実験が出来なくなってしまうた。

「まあ、利点が無い訳じゃないんだけど疲れる」

俺は人目がない事を確認してからアタシに変わり待ち合わせ場所へと急ぐ事にした。

待ち合わせ場所につくと既に留美はアタシを待っていてアタシの姿を発見するとキャーキャー言っつて纏わり付いてきた。やっぱり疲れる。

決戦当日。前回より少し遅い11時48分に俺は現場 前回と

同じ倉庫街に到着した。

「来た来た」

そこでは既に前回と同じ『監視者』の女性とインゴット 楠留美が待っていた。

「さて。二人とも2回戦な訳だからルールは分かっているわね?」

「ええ」

留美は厳しい顔で俺を睨みつけながら。俺は無言で頷いた。

「それじゃ自己紹介・・・は必要ないか。聞きたい事もないだろうし私は所定の位置に付いているわね」

そう言って監視者は居なくなり場には俺と留美が残された。

「なあ」

それを確認してから俺は留美に声を掛けていた。

監視者達

「リバーズ対インゴットか。相性的に言ってリバーズの方が有利ね」「そうかい？」

前回と同じく決戦を遠巻きに眺めながら私達は暢気に会話を楽しんでいた。

「だってインゴットは言ってみれば硬化能力、自身の身体を硬質化する事によって驚異的な防御力を獲得する能力でしょ？確かに並みの相手ならどんな攻撃も通じない絶対防御なのだろうけどリバーズには『リバーズエッチ反転凶刃』があるじゃない。あれを喰らえば幾らインゴットでも一撃よ」

「どうかな」

私の意見に今回も彼は異論を挟んでくる。

「僕の個人的な意見で言えば相性という点で見れば圧倒的にインゴットが有利だと思うよ」

「何処が？」

「確かに『リバーズエッチ反転凶刃』が当たればリバーズの圧勝になるだろうがインゴットの本当の特徴は防御力だけじゃない。インゴットの注目すべき能力は硬質化したにも拘らず本来の柔軟性を失わないという点にあるんだ」

「結論だけ言ってくれない？」

やはり前回と同じように時間を掛けてもつたいぶって話すつもりのようにだ。彼の事は嫌いじゃないけれど、こつ言つ所はどうしても好きになれない。

「やれやれ。要するにインゴットは硬質化しても素早さを失わない
って事だよ。そして『リバースエッチ反転凶刃』のように特殊な形状の武器を警戒
しない訳がないからね。リバースの攻撃は早々インゴットには命中
しないだろう」

「それでもリバース有利に聞こえるけど？」

リバースの攻撃は一度でも当たれば勝ちなのだから。

「インゴットの硬質化は何も防御にだけ適応される訳じゃない。あ
の硬度から繰り出される攻撃はヘビー級のボクサーを軽く凌駕する
威力がある筈さ」

「それこそリバースの独壇場じゃない。『リバースコア反転結界』があるんだか
ら」

「忘れてしまったのかい？インゴットは防御に特化した能力者なん
だよ。自身の攻撃が跳ね返った位じゃびくともしないし、『リバースコア反転結界』
には回数制限がある筈だよ。何度も防げはしないさ」

「・・・」

言われてみれば確かにその通りだ。『リバースエッチ反転凶刃』の利点のみに注
目していたが全体的に考えれば圧倒的にインゴット有利の形になる。

「それじゃ貴方はインゴットが勝つと思っているの？」

「堅実に戦うならインゴット有利と言っただけさ。何かよほどの策
でも用意していない限りインゴットの勝ち揺るがないだろうけど」
「ふ〜ん」

私は適当に相槌を打って決戦の場へと視線を戻すとなにやらリバ
ースがインゴットへと話し掛けていた。

「なあ。今からでもこの戦い放棄出来ないかな？」

場に仕掛けた集音マイクが拾ったのは前回と同じようなりバース
の説得だった。

「君とは戦いたくないんだ」

「馬鹿じゃないの？」

対するインゴットの返答は冷たい物だった。

「私を女だと思ってそんな話をしているなら止めてくれない？私あ

んたみたいな軟弱男って大嫌いなの」

『それじゃ、どうあっても戦うって言つのか?』

『当たり前よ』

『そうか』

そこで会話は終わる。相変わらず普段のリバーは戦意ゼロのようだった。

「えげつないね」

「え?」

そこで彼の言葉が届いたが同時に決戦開始の合図が鳴り響いたので聞き返す暇もなく戦いは始まってしまった。

『はあああ!!!』

まず先制で能力を発動させたのはインゴット。気合の入った声と共に身体を硬質化させたようだ。

『・・・』

対するリバーは動かない。

『?』

怪訝に思ったインゴットは警戒しているのだろう。行き成り殴りかかる事はせず距離を取って様子を見ている。

「どうやら勝負ありだね」

「え?」

「最初に問答無用でインゴットが殴りかかっていれば可能性はあったが、こうなってはもう何をどうした所で結果は変わらない」

「どつという意味?」

「直ぐに分かるさ」

その言葉通り、動かなかつたりリバーは前回と同様に右手で左肩を掴むような動作をしてから。

『リバー Reverse Start』

能力を発動させながら右手を右下に振り下ろした。

そして本当にあっという間に勝負は終わった。

「え?」

アタシを前にインゴットは完全に戦意を失っていた。

「お、お姉さま?どうして、ここに?」

「決まっている。アタシがリバーズだからさ」

「嘘!」

インゴットは地面に膝を着きアタシの言葉を首を振って拒絶する。

「嘘!嘘!そんなの絶対嘘!」

「どんなに拒絶してもあなたの目の前にあるのが真実だ。さあ潔く

アタシと戦いな!」

「嫌です!」

インゴットは両手で頭を抱えてまたブンブン首を振る。

「何で、何で私がお姉さまと戦わなくちゃいけないの?そんなの嫌です!」

「アタシはちゃんと決戦前に言ったよ。『あんたとは戦いたくない』
つて。それに対してあんたは何と答えた?」

「!!!!」

「『馬鹿じゃないの?』と答えたな?あんたはアタシの心遣いを踏みにじった」

「そ、それは・・・」

「決戦前なら兎も角、決戦が始まってしまえば殺し合うしか手が無くなる。この結果を望んだのはあんた自身だよ」

「う、うわあああ!」

インゴットはアタシの言葉に蹲って泣き出してしまった。そのインゴットに『リバーズエッチ反転凶刃』を引き抜きながらユツクリと近付き、インゴットの肩を掴んで顔をあげさせた。

「でもね、アタシはあんたの事嫌いじゃないんだ」

「え?」

アタシはキョトンとした顔のインゴットの顎を左手でそっと掴む

と。

「ん!？」

その唇にそつと口付けた。最初戸惑ったインゴットも直ぐに大人しくなつてそつと目を閉じた。

長い、長いキスをしてからそつと唇を離し、余韻に浸り目を閉じたままのインゴットに。

「じゃあね」

右手で振り上げていた『リバースエッジ反転凶刃』を容赦なく振り下ろした。

「なるほど。確かに『えげつない』わね」

脳漿の飛び散ったインゴットから腕輪を抜き取ったアタシに監視者の女はいつの間にか近付いてきていた。

「何か用？」

「勝利の祝福に來たの」

「余計なお世話」

アタシは奪った腕輪を右手に通し『リバーエンペラー反転支配』のLvをあげる。

「丁度良いから聞くけど、これってLv3になつたの？それともLv4？」

「4よ。能力のLvは腕輪の数に左右されるの。Lv2の腕輪を二つ合わせれば4になるのは当然でしょ？」

「ふ〜ん」

聞きたい事も聞いたしさつさと帰る事にして監視者に背を向ける。「私からも一つ聞きたいんだけど・・・」

そのアタシに監視者が背後から声を掛けてきたので少しだけ振り返る。

「最初から作戦だったの？あの子に近付いてあの子の好意を利用する為の作戦だったのかしら？」

「・・・」

くだらない事を聞かれたので再び背を向けて歩き出す。

「さつきも言っただけど・・・」

そのついでに少しだけ答える事にした。

「あの子の事は嫌いじゃなかった。帰ったら泣いてあげるくらいにはね」

そのまま止まらずにその場を去るアタシの背中に『嘔吐き』と小声の言葉が確かに届いていた。

ああ。その通りだよ。

第三章

インゴットとの決戦と呼ぶに相応しくない戦いから数日。

Lv4になった腕輪はLv2の時よりも青くなっているようだった。しかし、そんな物を眺めている暇もなく。

「痛っ！」

俺は無様にすっ転んで尻餅を着いていた。

「くそ」

かなり無様に転んでしまったが回りに居る人は誰も俺に奇異の視線を向けたりはしない。さっきから何度も転んでいると言う事もあるのだが、ここで転ぶ事はそれほど珍しくないと言う事も理由だ。

何を隠そう、俺が今居る場所はスケート場なのだ。

別に遊びに来た訳ではない。というか一人でこんな所で遊びに来るほど俺は酔狂ではないつもりだ。

俺がこんな所に来たのはインゴット戦の次の日に送られてきた3回戦の対戦相手の対策の為だ。前回と同様に顔写真と略称である『サイク』と名前が送られていた。

一応顔写真をインゴットを知っていたクラスメイトにも見せてみたが今回は流石に知らなかった。まあ、当然かもしれない。奴は一般人のクラスメイトであって情報屋ではないのだから。

故に真っ向勝負を予感してこうして次の反転技の練習の為に毎日放課後にスケート場へと出向いている訳だ。

「ふう」

しかし予想以上にこれが上手いかない。一応スケートの滑り方などはネットや書店で調べてきたのだが俺が欲しいのは普通のスケートの滑り方ではないので予想以上に手間取っていた。

「あら。奇遇ね」

そんな事をつらつら考えて端っこで休憩していた俺に声が掛けられた。まさかこんな所で知り合いに会うとは全く思っていなかった。で少し驚いて顔をあげると。

「・・・」

「挨拶くらいしたら？」

あの監視者の女性がにこやかな笑顔で立っていて俺をゲンナリさせた。何が楽しくてこんな公共の場所で非日常の象徴と会わなくてはならないのか？

「コンニチハ。オヒサシブリデス」

「うわ。凄い棒読み」

「何か御用ですか？」

「ん〜。本当にただの偶然だって言ったら信じてくれる？」

「2%くらいなら」

「あつそ」

一応同じ町に住んでいるのならそんな偶然もあるだろうが、このタイミングとなるとはつきりいって怪しい以外の感想が出ない。偶然出会ったというより俺を監視していたと言う方が合理的だ。

「まあ私の詮索は後にしてちょっと付き合わない？」

「何処に？」

「喉か沸いちゃったから休憩スペースでお茶でも」

「奢ってくれるなら」

「オツケーオツケー」

意外にすんなり了承されて拍子抜けだが言ってみればただのお茶だ。スケート場に通う為困窮している学生の身分の俺よりも社会的な年齢の彼女の方が余裕あるのだろう。

「で。実際の所どうなの？」

ホットのコーヒーを黙々と啜っていた俺に彼女は当然のように聞いてきた。主語抜きで言われても困るが何を聞かれているのかは予想出来る。

「何が？」

素直に答える義理など無いので誤魔化すが。

「遊びでこんな所に来た訳じゃないんでしょ？進展の方はどうなのかな〜と思って」

「前にも言っただが監視者を自認する奴にそんな事を答える義理があるのか？」

「つれないな〜」

「つれなくて結構だ。というか監視側に好かれてもあまり得な事があるとは思えない。」

「他の監視者は兎も角、私自身は結構君の事を評価しているんだけどな」

「決戦の情報は秘密にしてくれるんじゃないのか？」

「監視者の上層部には報告の義務があるの。漏れる心配が無いと言ったのはこれから君が戦う相手にとって意味よ」

「あつそ」

「ちょっと嫌味を言ってやりたかっただけで、その辺りの事を疑っている訳ではない。そもそもその辺りを疑ったらきりが無い。」

「でさ。今やっているのって次の対戦の対策だよな？」

「それが何か？」

「次の対戦の相手の情報があるって言ったら知りたい？」

「・・・」

はつきり言っただけで喉から手が出るほど欲しい。次の対戦相手は顔写真からしてまた女性なのだが略称である『サイク』だけでは何の連想も出来ないのが実情。

「教えてくれる気があるのか？」

「ん〜。どうしょっかな」

ニンマリと少し意地悪な感じで俺を眺める女。俺が食いついた事を少し楽しんでいる感じだ。

「どうしてもって言うなら教えてあげても良いけど、条件があるわ」

「何？」

「私にキスしてくれたら教えてあげ・・・んぐ！」

休憩スペースで向かい合わせに座っていた彼女の首裏に右手を回して引き寄せて強引に唇を重ねる。目を白黒させる彼女の要求を具体的に聞いていなかったたので舌も入れてみた。

「！！！」

ビクンと彼女が震えたのが分かったが問答無用で舌を彼女に口内にもぐりこませて隅々まで嘗め回す。時間指定もされていなかったのでたつぷり数分間濃いキスをしてからユツクリと唇を離れた。

「条件は果たしたぞ」

呆けてペタンと座り込む彼女に告げると何故か彼女はボロボロと涙を流して泣き出してしまった。

「何で泣く？」

「ご、ごめんなさい。私、本当は・・・大した権限持つて・・・ないから貴方の対戦相手の事なんて・・・何も知らないの」

「あつそ」

泣きながら途切れ途切れ独白する彼女を見ていると俺の方がまるつきり悪者だ。まあ悪者だわな。

「悪かったよ。冗談でキスしたのは謝る」

「じよ、冗談だったの？」

「決戦前に不平等になる情報を渡す訳無いのに思わせぶりな態度だったから」

「・・・」

俺が白状すると彼女は俺を無言で睨みつけてきた。

「酷い。私、初めてだったのに」

「俺だつて男の時なら初めてだった」

「嘘。初めてであんなに上手い訳ないじゃない！」

「どうして初めての癖に上手いか下手かなんて分かるんだ？」

「な、なんとなくよ！」

何だかもう支離滅裂だ。

「責任取ってよ、女垂らし」

「何をしろって言うんだ？」

「ここで何をしていたのか教えて」
随分理不尽な条件を出してきた。

「摩擦係数を反転した状況の訓練だ」
「え？」

「靴の裏の摩擦係数を反転してゼロにした場合の状況を想定した時の為の訓練だ」

「ど、どうして？」

「そうした方が移動速度が速くなって有利かと思って」

「そ、そうじゃなくて！どうして私に話したの？」

「責任を取れと言ったのはそっちじゃないのか？」

「・・・」

彼女は複雑そうな顔をしていたが直ぐに立ち直ったのか俺を少し睨みつけてくる。

「嘘でしょ？もしくは嘘じゃなくても全部を話してない。違う？」

「続けて言うなら新技『リバースエア反転滑走』の為の必須項目だ」

俺は『リバースエア反転滑走』について包み隠さず全部話してやった。

「以上だ」

話し終わると同時に何だか疲れたので今日はもう帰る事にした。

「待つて」

その俺を呼び止める彼女。

「それじゃ後一つだけ。これを教えてくれたら全部許すから」

神妙な声で俺の背中に語りかけてくる。

「貴方の真名を教えて。腕輪を着けた時、頭の中に刻み込まれた貴

方の能力名の正式名称を」

「『リバースエンペラー反転支配』だ」

迷う事無く答えると背後の彼女は安堵したように息を吐き

「ありがとう。『リバースエンペラー反転支配』」

そう言っつて俺を見送った。

リバーズ対サイクの決戦当日。

私はいつものように能力者二人を引き合わせた後、彼の待つ観戦席で決戦が始まるのを待っていた。

「何だか嬉しそうだね」

「そう？」

そのつもりは無かったのだが彼から見ると私はそう見えるらしい。「言っておくけど、この決戦が終わるまでは君も監視者という立場にあるのは忘れないでね。監視者が一方の能力者を応援するのは禁止されているんだ」

「べ、別に私は彼に肩入れなんて・・・！」

自分の失言に思わず私は自分の口を噤む。決戦者は男と女なのに『彼』と表現してしまえばどっちに肩入れしているのか告白しているような物だ。

「自覚があるなら今の内に戒めておく事だね。この決戦が終わればどちらかは確実に死ぬ事になるんだから余り深入りはしない事だ」

「大丈夫です」

「ふん。それほど自信があると言う事は新技でも披露して貰ったのかな？」

「・・・」

「それとも真名でも教えてもらったのかな？」

「！！！！」

ポーカーフフェイスを保とうとしたが思わず驚いて彼を振り返ってしまう。振り返ってから失敗した事に気付く。

「なるほど。それは肩入れする訳だ。監視者としてはどうかと思うが、折角の祝いだ。この場だけなら黙認する事にしよう」

「・・・ありがとう」

自分の格好悪さにちよつと自己嫌悪に陥りながら私は決戦開始の合図を機に二人へ視線を戻した。

決戦前に渡された情報によるとサイクは念動力系の能力。Lvは

リバーズと同じ4。リバーズなら大丈夫だとは思いますが決して油断は出来ない相手だ。

「あまり手に汗握って倒れてしまわないようにね」

「わ、分かっています」

私は無意識に握り締めていた拳を開いて深呼吸する。

決戦場ではいつものようにリバーズが女性へと反転を終えて敵意全快に高笑いをしているところだった。

「・・・」

戦闘には有効だとは思いますが、やっぱりあれはどうかと思うな。

対するサイクは服の中からジャラジャラと何処に隠していたのかと思うほど長い鎖を出して周囲に展開していた。ご丁寧に鎖の先には鉄で出来た凶悪な形の杭がついている。

「型で言うならサイクは少しリバーズと似た所があるタイプ有能力者だね。触れた物限定で自在に操る事が出来るサイキッカー念動力者」

「それで『P s y c』ですか」

「正確には『念動力』なのだけだね」

私達の話をもとに戦いは開始される。先制はサイクの鎖攻撃。まるで蛇のように動く鎖がリバーズへと迫り、間髪で回避したりリバーズを中心に巻き付けて

「リバーズ エッチ反転凶刃！」

リバーズが服の中から引き抜いた鎖の鞭によって捻じ切られて地面に落ちる。

「流石に3回戦ともなるとちょっと高度な戦いになるみたいだね」

「・・・」

思わずグツと握り締めた拳を慌てて開いた私に彼は気にした風もなく告げてきた。

「しかし手数で言ったら圧倒的にサイクが有利だね。リバーズも善戦しているけどあの数の鎖を全て捻じ切るのは無理だろうし」

「だ・・・いえ、なんでもありません」

『大丈夫です』と言いかける自分を何とか制して観戦を続ける。

「ふむ。それにしてもリバーは何かを気にしているようだね。彼の左手につけている物と何か関係があるのかな？」

「……」
そう。今回リバーは左手に新しい装備を着けている。見た目腕時計のような物を着けていて、さつきからそれをチラチラ見ながらサイクの鎖に応戦している。

「どうやら場所を確保したいようだね。まあ、あからさま過ぎて妨害されているみたいだけど」

「えっと。あれ？」

私はリバーが確保しようとしている場所と、私が頭の中で計算した場所を照らし合わせて見るが 何だかずれてしまっている。

「というか今リバーが立っている場所って。」

「何をするつもりか知らないけど、この場所は私が先に確保したのよ。欲しいなら席料を払いなさい」

「あつそ。なら……」

リバーがポケットから何かを取り出す。どうやら初戦で戦ったブリッドが使っていたのと同種のコインのようだ。

「10円玉？」

予算の都合でかなりケチっていた。そういえばスケート場に通うのに散財したと言っていた気がする。

リバーはその10円玉を胸の前に掲げると、摘んでいた指を離した。

「釣りはいらない」

「な!？」

リバーの離れた10円玉が高速でサイクに迫る。避けられないと瞬時に悟ったサイクはありったけの鎖を己の周囲に巻きつけて防御をはかった。

「無駄よ」

そのサイクに私は冷たく告げる。

その私の予言を忠実に再現するようにサイクに一直線に向かった

10円玉は。

「げぼ!!!」

サイクに巻かれた鎖ごと、サイクを粉々に打ち砕いて地面にばら撒いた。

「恐ろしい威力だね。事実だけを見ればブリッドの能力に酷似していたけど、威力は段違いだ」

当然だ。あれはブリッドの使っていた狙撃系の能力とはレベルが違いすぎる。

「個人的な見解だけど、あれは恐らくコインを飛ばしたのではなく固定したんじゃないかな？」

「・・・」

相変わらず鋭い。

「あの距離とは言えあの速度だ。恐らくは摩擦係数を反転してゼロにした上でその場に固定。そこから更にコインに掛かる『地球の自転』を反転して置き去りにしたのだろう。だからしきりに方角を気にしていたんだね」

悔しいが正解。リバーズが確保しようとしていたのは方角だ。コインを固定して地球がまわる方角。つまり敵に対して東の方角を確保しようとしていたのだ。途中で気付いたが視線を向けていた先はブラフだったのだろう。

「で。この見解が正解かどうかは尋ねないから、この新技の名前だけでも教えてくれないかな？聞いているんだろう」

「・・・『^{リバーズエア}反転滑走』」

「良い名前だ。そして条件は厳しいが良い技だね」

リバーズを褒めて私を応援するような態度だが、彼の場合何となく祝福されているような気がしない。

「さあ。彼が待っているよ」

「ええ」

それでも私は勝者であるリバーズ元へと赴く事にした。

なんと言っても今日は私の記念日になるのだから。

「ち。10円損しちゃった」

「せこい事言わないでよ。折角の必殺技を節約してどうするの?」

「やかまし。今のアタシの経済状況じゃ本当なら1円玉を使ったか
つたくらいだ」

「やれやれ」

肩を竦める女を尻目にアタシはバラバラ死体になったサイクから腕輪を拾い上げる。色から判断してどうやらアタシと同じLv4のようだ。

アタシはそれを右腕に装着しようとして。

「あ。ちよつと待って」

監視者の女に待ったをかけられた。

「そのまま装着したら腕輪が3つ分無駄になってしまっわ。バラしてあげるからちよつと貸して」

「バラす?」

「腕輪の能力はLv5が最大なの。だからそれをそのまま右腕に装着すると3つ分の腕輪が消えてしまっのよ」

「聞いてない」

「今言っただじゃない」

「この女、良い度胸している。」

「ほら。貸して」

「ち」

渋々ながら腕輪を女に渡すと青い腕輪から白い腕輪を取り出してくれた。アタシが拾った時と同じ色　Lv1の腕輪だ。

「はい。これを右腕につければLv5に出来るわ」

「そりゃどうも」

受け取った白い腕輪を右腕に通すとLv4の腕輪は更に青みを増

した色になった。恐らくこれが腕輪の最終形態なのだろう。

「残りの腕輪はどうするんだ？」

「サイク的能力が欲しいなら左腕につければ手に入るわよ」

「いらね」

「そういう事なら私が預かっておくわ。というか・・・」

女は両腕を俺に掲げてきた。

「私が貰うわ。3つあれば私の腕輪を両方Lv5に出来るの」

女の両腕にはLv4の腕輪とLv3の腕輪が嵌っていた。

「ちよつと待て。なんでオメーにアタシが手に入れた腕輪をタダでやらなくちゃいけね〜んだ？」

「良いじゃない。どうせ要らないんでしょ？」

「他人にやるくらいならアタシが机に仕舞って置く」

何気なく言ったアタシの言葉に女の表情が曇る。

「他人・・・なの？」

「どういう意味だ？」

「能力名の真名を明かす事がどれほど危険か分かっているのでしょう？それを明かした私を他人と言い捨てるの？」

「要求したのはそつちだろ？」

「答えたのは貴方よ」

平行線になりかかる視線を先に逸らしたのは女の方だった。逸らしたままアタシに何かを差し出してくる。

「これ。予選を通過した貴方にプレゼントよ」

プレゼント、という割には暗い声で渡してくる。渡された物は薄いアルバムのような本だった。開いてみると携帯に送られてきたような顔写真と能力名の略称が記されていた。

「何だ、これ？」

「これから始まる本戦の対戦相手よ。今までの予選と違って完全なバトルロワイヤルになるわ。いつ何処で仕掛けても自由」

「ふ〜ん」

ペラペラとページをめくる。携帯に送られた物と違って1ページ

に丸々一人の情報が書いてあつてとても見やすい。その調子でページをめくっていき『そのページ』で指を止めた。

別に何かおかしな事が書いてあつた訳ではない。そこにも他のページと同じように顔写真と能力名が書いてあつただけだ。

目の前にいる女の顔写真と能力名『ミラー鏡界天主』の名。アタシは思わず女に視線を向ける。

「言い忘れたけど、今日で私も監視者の任を降りて本戦に参加する事になっているの」

「そんな事は聞いてない。アタシが聞きたいのは・・・」

アタシは女の情報が書いてあるページを捲り、引つ張る。そのページだけ2重になっており表のページを剥がした裏には変わらない顔写真と『テンペスト』の能力の略称が書いてある。

「何故真名を明かしたのかつて事だ」

「そんな事が聞きたかつたの？」

「・・・」

アタシは聞くか聞くまいか考えたが結局聞く事にした。

「この本戦とやらは何人までが生き残れる事になっているんだ？」

「5人以内よ」

「そうか」

つまり、今までの予選とは違って他の能力者と『組む』事も考慮されている訳だ。そしてこの女は本戦の参加者で真名をアタシに明かした。アタシの真名も知っている。

アタシが女に視線を向けると女は直ぐに視線を逸らした。年上の癖に面倒臭い女だ。

「リバース反転・・・オフ解除」

反転を解除して男の姿に戻った俺に上目遣いで視線を向けてくる女。

「正直、何で俺なんかと組みたがるのか理解出来ないんだが・・・」

「私も良く分からないわ。何で貴方と組みたがるのか自分でも理由が分からない」

「そんな理由で相棒を決めて良いのか？」

女は無言で、しかし確かに動作でコクリと頷いた。正気とは思えないが俺は以前と同じように女　テンペストと誓約の口付けを交わした。今度はテンペストも素直に受け入れた。

第四章

「本戦になればいつ、何処で狙われるか分からないから自宅や学校に留まるのは危険だわ」

そういう理由付けで俺は自分の家から荷物を纏めてテンペストの家に転がり込む事になってしまった。女の癖に一人暮らしのテンペストは年齢に見合わない豪華で広いマンションに住んでいたのも理由だ。

「一体どんな仕事をすればこんなマンションに住めるんだ？」

「能力を使ってちよつと世間を黙らせれば幾らでもお金って手に入るのよ」

「・・・」

ジト目でみたら急にオロオロしだし。

「ごめん。本当は上層部が本戦出場者に用意してくれたマンションなの」

「だと思った」

アツサリ真実を白状した。ともあれ、これでここに住むのに変な遠慮をする必要は無くなつた訳である。

本戦に望むに当たってテンペスト ミラージテンペスト 『鏡界天主』 ミラージテンペスト の能力を把握する必要があつた。基本的に『鏡界天主』の能力はその名の通り鏡を模した能力と言つていい。自分自身か、もしくは彼女の視界に入るものに限定してその見た物を完全に再現して映し出す事が出来る能力。勿論、映し出された映像はただの映像である為、物理的には攻撃する事も防御する事も出来ないが。

「ふん。色々応用が利きそうな能力だな」

正直、今まで対峙したどんな能力者よりもその能力を気に入つた。

そして彼女が持つもう一つの能力は『クローズ』。自身の能力ではなく奪い取った能力である為、真名や本当の効果は不明だが自分を中心に暗闇を作り出す能力らしい。その世界では彼女の意思に反する物は灯りすら灯す事が出来ないらしいので『鏡面天主』ミラージョンベストと合わせれば絶大な効果を得られる事間違いない。

この二つを持った彼女は物理面より精神面で凶悪な能力者であると言っても良い。

「ところで何で今まで7つしか腕輪を持ってなかったんだ？予選を潜り抜けたなら普通8つ持っている筈だろ？」

「1つ放棄したの。1戦目の相手の能力を貰って左手に着けたんだけど2戦目でクローズと当たったから1戦目の腕輪を放棄して1つ捨てたのよ」

「放棄なんて出来るんだ」

「真名を持つ自分の能力では不可能だけど、後付の能力なら可能よ」「ふ〜ん」

「言うておくけど返さないからね」

「要らない」

ともあれ俺達的能力を整理すると『リバーエンスペラー反転支配』、『ミラージョンベスト鏡面天主』、『クローズ』がそれぞれ最高値のLv5。個人を相手にするなら頼もしい能力群なのだが。

「相手も腕輪を一人8つ前後持っているって仮定して、しかも俺達のように組んで襲ってくるって考えると考えると・・・」

「あまり楽観的には考えられないわね」

一人二人なら兎も角、生き残り限界数の5人で組まれれば苦戦は必至だ。

「一応こちらの戦力を強化するって言う手もあるけど」

「気が進まない。俺達のようにお互い真名を知っているならまだしも他の奴を仲間にするのに面識が無い以上、連携が崩れる不安の方が大きい」

「だよね」

そもそも俺達二人だって連携を組み立てるのが大変なのに無駄に人数を増やしても足手纏いになる可能性が高い。

「今の所二人で対策を立てて、能力の拡大を謀るのが先かな」

「初めに襲ってくるのが雑魚の集団なら楽なんだけど」

「樂觀視して油断しないでね」

「そこまで楽しい人生送ってきてない」

一番初めに襲ってくるのが本戦最強の能力者である可能性もあるのだから。

隠密と言うか部屋の外に出る場合、俺とテンペストの能力は非常に有効だった。俺は自分を女に反転させて本戦登録の顔写真を誤魔化せしテンペストは鏡を操る能力だけあって光を屈折させて別人に成りすます事が出来た。

「その気になれば姿を完全に見えなくする事も出来るんだけど、ちよつと消耗が激しいのよ」

「どうでも良いわ。そんなの」

女になったアタシは心なしかテンペストと相性が悪い。別に嫌っている訳ではないのだが同性愛の気が無いアタシとしては自分に近い位置にいるテンペストに何だか拒否反応に近い物が出てしまうのだ。

「初キスは女同士だったくせに」

「やかまし」

インゴットとの一件は苦い思い出なので思い出したくないと言うのに無神経な女だ。

「それより学校の方は大丈夫なの？ある程度は上層部が介入してくれるけど出席日数に不備とかがあったら少し拙いわよ」

「大きなお世話です。年上だからって保護者ぶるの止めるよな。これだからオバハンは」

「・・・」

「ひぐ！」

突然テンペストがアタシの顔を鷲掴みにすると物凄い力で締め上げてくる。

「ちょ！待て、待ってください！いた！いたた！いたた！！」

「誰がおばさん？ねえ誰がおばさんの？」

「ち、違う。言葉の綾です！誰もおばさんなんて思っていないません！」

「この際丁度良い機会だわ。前から聞きたかったんだけど貴方、私の事幾つ位だと思っていたのかしら？」

ここで答えを間違えると命に関わる気がする。本当は25、6にだと思っけど、少々サバを読んで若く答えておく事にした。

「に、24？」

「・・・」

「いひゃひゃひゃひゃ！！！！」

無言でアタシの顔を掴む手に力が増加された。

「そう？私ってそんなに老けて見えるのかしら？」

「い、いえ。今は公約年齢の最大値だとそのくらいだという話ですー！！」

「そう？じゃあ、本当はいくつ位に見えるの？」

「えっと」

僅かに手の力が緩んだのを確認して必死に頭を働かせる。24で駄目だったなら23か？いや、ここはもう一つサバを読んでおこう。

「22？」

「・・・」

「あががが！！！！」

また無言でアタシの顔が締め上げられる。

「老けて見えて悪かったわね。こう見えてもまだ二十歳なのよ」

「え？ええええ！？」

「・・・」

「はががが！！！！」

思わず疑いの声をあげてしまったら更に強く締められた。だって

二十歳って言ったたらアタシとちょっとしか違わないではないか。

「酷い目にあつた」

「それはこつちの台詞よ」

アタシは物理的に、テンペストは精神的に酷い目にあつたらしい。「顔の形が変わるかと思つた。お嫁にいけなくなつたらどうしてくれんのよ？」

「私は心に大きな傷が出来たわ。責任取つてよね」

こつちにはツツコミも無しですか。

アタシは肩を竦めて歩き出し、暫く歩いてから無言で横に並んだテンペストを軽く肘でつついて注意を促す。

「ええ。気付いているわ。本戦の登録者『サイレン』ね」

こちらと擦れ違うように正面から歩いてくる人物は本戦の対戦相手の一人だつた。人ごみの中を歩いているので気付いたのは偶然のような物だがテンペストはアタシよりいち早く気付いていたらしい。彼女の能力は攻撃よりも探査向きなのだ。

「どうする？」

「この場で不意打ちを仕掛けられれば良いのだけど、『リバースエッジ反転凶刃』では周囲を誤魔化す事が出来ないし、『リバースエア反転滑走』では効果範囲が広すぎて回りに被害が出てしまうわ」

本戦出場登録書に記載されていたのだが、最低限のルールとして一般人に危害を加えた場合は失格として腕輪を取り上げられる事になつていた。言つてしまえばルール違反「死と言ふ事だ。」

「それじゃ通り過ぎてから尾行して人気の無い所で襲撃すつか」

「物騒だけど、それが良いわね」

アタシ達はアタシ達の顔を知らないサイレンを普通に通り過ぎてから彼の尾行を開始した。

「ねえ。気付いてる？」

「ああ。言われるまでもなく畏だろつな。多分人気のある場所で姿

をさらす事によって自分を追跡してくる奴を誘き出して迎え撃つ罠だ」

「陳腐だけど悪くない作戦ね。相手が私達じゃ無かったらの話だけ」

「ふん」

そう。アタシ達は罠だと知りつつサイレンの追跡を断念しなかった。これはテンペストと組んでの初めてのアタシ達の実戦であり初陣だ。正直アタシはアタシ達がどれほどの力を発揮出来るのは一刻も早く試してみたくてウズウズしていた。

「やる気があるのは良いけど先走らないでよ」

そんなアタシに気付いたのかテンペストが戒めてくる。確かにウズウズしていたが独断専行して一人で飛び出すほど間抜けになっただけでもない。アタシは無言で頷いた。

アタシ達のやり取りを他所にサイレンは狭い路地に入っていくつかの角を曲がる。その幾つか目の角を曲がった時、待っていた展開がやってきた。

「ようこそ。お嬢さん方」

狭い直線的な通路。その先でアタシ達が追跡していたサイレンともう一人の男がアタシ達を待ち構えていた。偶然かもしれないがアタシ達にとって理想的といえる場所での遭遇だ。

「何の話でしょう？」

「とぼけるのは止して貰おうか。ずっと彼を尾行していたな？」

バレているのは承知の上で尚アタシ達とはぼける。折角相手はこちらの顔を知らないのだから攻撃のタイミングはこちらで取らせて貰う。

「彼がちよっと好みのタイプだったからお茶に付き合っただけで貰おうと追いかけてきただけなんですけど」

テンペストは白々しく言っただけでアタシ左後ろの位置をさりげなく確保する。

「右前16。斜め上24。距離は300ちょい。下から145

センチの位置が最も展開に理想的な位置よ」

そしてアタシからは見えないが腹話術師のように唇を動かさずに小声でアタシに情報を渡してくれた。ピッタリくっつくような距離は女になったアタシとしてはちよつと引き気味だが、これ以上離れて貰っても困る。

「下手な嘘だな。自慢じゃないが僕は生まれてからこの方女性に声をかけられる容姿をしていない事は自覚している」

「準備完了。タイミングは私が計ります」

『了解』の意味を兼ねてアタシはテンペストの右手を左手でぎゅっと握る。彼女は力強くアタシの手を握り返してくれた。

「ま。確かにそんなブ男にアタシ達が声をかける訳無いわな」

アハハと笑ってやるとサイレンは自分で言ったくせにムツとした表情で黙り込む。

「つまり、君達は俺達の敵であると認める訳だな？」

「当たり前だろ。守秘義務があるのに関係者でもない奴が手前らを付け回す理由が何処にある？」

「ふん。一応名前を聞いておこうか？」

「リバーズ」

サイレンの連れの男 登録名『イージス』が登録書を捲りアタシの名前を確認してくる。ちなみにアタシ達は登録書など持ち歩いていない。折角姿形を変えたのに、そんな証拠品を持ち歩いては水の泡になってしまう。だからアタシ達が組んで初めにやった事は登録書の全員の顔の名前を頭に叩き込む事だった。

「これが。顔写真と随分と違うが確かに登録されているな」

「来た。カウントダウンするわ。3、2、1・・・今」

『リバーズコア
反転結界！』

アタシはテンペストの合図と共に指定された位置に指定された計算式を元に『反転結界』を展開する。

展開した次の瞬間にアタシの身体に何かが命中し それをそっくりそのまま跳ね返した！

「命中。お見事」

「ナイスサポートだ。相棒」

アタシ達の右前方斜め上にある300メートル離れたビルから狙撃しようとしていた相手　アタシは見えていないがテンペスト情報によれば能力名『スナイプ』の狙撃をアタシが跳ね返して命中させ絶命させた。

「ば、馬鹿な」

「何だ？どうした!？」

恐らくサイレンは超音波か何かの能力者でレーダーと言うかソナーのような役目を果たしていたのだろう。尾行をその能力で探知した後、この場にアタシ達をおびき寄せてからは3人目であるスナイプとの連絡を取り合っていたのだと思う。

そのスナイプが狙撃直後に絶命したので呆然としていた。

「お前達、何をした!？」

「は！わざわざ答えてやる義理は無いね。あんた達にやる物があるとしたら・・・」

アタシはスカートのポケットから取り出した10円玉を胸の上辺りに掲げて準備する。

「もうちょい上。それで左よ」

テンペストの指示に従って微調整してから、その10円玉をそっと離れた。

「こいつをプレゼントしてやるよ!！」

その場に固定された10円玉に、本人達にはその気はないだろうが地球の自転に乗ってイージスとサイレンが突っ込んでくる。

「ち!！」

アタシが何か攻撃をすると悟っていたのだろう。イージスはアタシが10円玉を離すよりも早く自分達の前面に何かを展開していた。透明な不可視の何か。それに10円玉がぶち当たって押し留められる。

「残念だったな。俺の能力はイージス。あらゆる能力を防ぎきる盾

を作り出す能力だ！」

「あっそ」

自慢気に説明するイージスに対してアタシは冷めた声で対応した。
何故なら。

「う、うおおお!？」

その盾ごとイージス達は10円玉に押されて壁に押しつぶされていた。アタシの能力はアタシの手から離れても1分間は持続する。それはつまり地球の自転から切り離され固定された10円玉は一分間その場に固定され、そして地球の自転に乗ったイージス達は無敵の盾を携えながら10円玉に引っ掛かって背後の壁とプレスされる訳だ。

「ぐ、ぐぬぬぬ!!!」

本来ならイージスには盾を斜めに展開して自分達の身体ごと軌道を逸らすという手段もあったのだがテンペストのサポートによつて、その可能性が最も低い位置で10円玉が固定されたので成す術もな

く。
「ぐぎや!!!」

自分の盾と背後の壁に押しつぶされて潰れたトマトみたいになつて絶命した。

「ま。アタシ達の西側を陣取っていたあんた達の無策が敗因だよ」

『^{リバースエア}反転滑走』の条件を勝手に整えてくれた奴らに感謝だ。

「思ったよりずっと上手く行つたわね」

「そうだな。アタシ一人だったら流石に3人は相手出来なかつたしね」

今回の戦いでテンペストの活躍。まず囷であるサイレンを逸早く発見した事から始まり狙撃者の早期発見と位置計算、『^{リバースエア}反転滑走』の10円玉最善固定位置の支持だ。

相手にサイレンという広範囲探査能力を持った能力者が居たように、こちらにもテンペストと言う能力者が居たのだ。

テンペストの能力はなんとと言ってもその『目』にある。

ミラーシオンペスト

『鏡面天主』という鏡を応用した能力によってテンペストは360度四方、更にもその気になれば月の凹凸まで視認出来るほどの視力を持つ。まあアタシの能力と違って消耗具合が距離に比例するのでそんな事をすれば一発で枯渇して死亡だろうが。

兎も角、今回の戦いで分かった事はテンペストの本当に凄い所は四方に視線を巡らせる探知能力でも狙撃者を発見した驚異的な視力でもなく、あの人ごみで逸早くサイレンを発見出来た情報処理能力だ。360度の視界全てが見えているのに、その情報を逸早く処理に必要なサイレンの顔をアタシより早く発見した。それこそがテンペストの最大の武器と言えるだろう。

「で、そんな物持ち帰ってどうする気だ？」

そんな物 今日倒した3人の能力者達から回収してきた腕輪の事だ。

「別に使うつもりが無くても一応回収はしておかないとね。他の能力者に拾われて能力強化されても困るし、一般人に拾われて守秘義務放棄で始末されるのもご免だし」

「それは分かるけど何に使う気だ？」

場所は既に潜伏先であるマンシヨンの中だ。そこで男に戻った俺とテンペストは持ち帰った腕輪の相談をしていた。

「まず『スナイプ』Lv5の腕輪だけど、これは論外ね。能力を使われる所は私しか見ていないし私にはクローズの方が相性良いしね」
この時点で初めて知ったが後付け能力を獲得する場合でも条件があり、その能力を自分の目で見ている必要があるらしい。そうしないと腕輪を着けても発動イメージが得られず発動が不発に終わるらしい。

「次に『サイレン』Lv4の能力だけど、これは私のテンペストと

被る能力だから私にはやっぱり不用ね」

「俺も要らない。というか着けても使いこなす自信が無い」

超音波を展開してソナーにするという理屈は分かるが発動原理がよく理解出来ないので使いこなす自信がない上に俺には優秀な探査能力を持つ相棒が居るのでやっぱり必要ない。

「最後に『イージス』Lv5の能力。これは一応使い道があると思うけど・・・」

テンペストは暫く思案したが、考えた末で俺に腕輪をパスしてきた。

「盾は欲しいけどテンペストと同時に展開した時に、テンペストがイージスの能力に打ち消されて穴があいてしまう可能性があるわ。」

私にはやっぱりクローズの方が相性が良いみたい」

「俺も盾なら欲しい所だけど、盾を展開してしまうと肝心の『反転結界』が発動しなくなる。『反転結界』はあくまで俺に触れた物を跳ね返す能力だから俺に触れる前に弾き飛ばす盾は要らない」

「結局全部使えないわね」

俺達が回収した腕輪は合わせて20Lv分。そのうちメインで14Lv分使われて残りはLv2の腕輪が3つ。こちらは使われた所を見ていないので論外だ。

「足とかに着けて3つ目の能力を獲得とか出来ないのか？」

「無理よ。腕輪はあくまで腕に装着して片腕に一つずつの能力しか持てないわ。3つ目の能力が欲しいなら3つ目の腕を用意するしかないの」

「化け物だな」

「それは兎も角・・・」

テンペストは話を打ち切ると登録書を持ってきて今日倒した3人の能力者にマジックでx印をつけた。

「これで3人。初日にしては上出来の結果ね」

「相手も悪くない連携と作戦だったが、初めに遭遇したのが俺達だったのは運が無かったな」

「そうね」

今日の戦闘を経て俺達は確かな実力を把握した。

初日に3人を撃破してから20日あまり。

「暇だ」

「状況が完全に膠着してしまつたわね。初日に私達が3人も倒してしまつたから皆警戒して準備期間に入っているみたい」

「こちらも準備は進めているがこつも何も無い日が続くとの唯のさばりみたいでなんだが気が引ける。」

「幾らなんでも、そろそろ動き出しても良い頃だと思つけど何の連絡も無いわね」

初日に俺達がやつたように敵を撃破すると登録者全員の携帯に連絡が行き、誰々が脱落と表示される。事実、俺達の携帯にも3人の脱落は表示されたが俺達が撃破した事は一言も表示されていない。この辺りは守秘義務が適応されているらしい。

「まあ、こつしていても仕方ないし買い物にでも行きましようか」

「買い物つて、何を買うんだよ？」

「貴方の服とか？」

「・・・」

表を歩く時には女に成らなくてはならない事を分かっていると言っているのだから性質が悪い。反転させれば確かに着られるが解除すれば男の俺が女物の服を持つ事になってしまう。

「さ。行きましよう」

「へいへい」

それでも逆らう気力もなく俺は彼女に付いて買い物へと出掛ける事になった。

人ごみの中を歩きつつもテンペストは警戒を怠らない。

1分に一度は360度四方に視線を投げて敵が居ないか情報を集めて処理しているというのだから、この女も大概只者じゃない。

「貴方にだけは言われたくないんだけどね」

もつとも、この女からするとアタシの反転計算やベクトル計算の方が並じゃなく見えるらしい。アタシから見れば絶対情報処理の方が面倒臭そうに見えるのだが価値観の違いという奴かもしれない。

「適材適所。私達が良い関係を築いているって証拠じゃない」

「そういうもんかね」

アタシが首を傾げている間もテンペストは周囲に視線を走らせ

「あ」

何となく不吉を予感させる声をあげた。

「どうした？」

「正面120メートル前方に堂々と仁王立ちしている金髪の女性が居るわ」

「金髪・・・『ゴールド』か？」

「ええ。間違いなく」

長く美しい金髪の能力者『ゴールド』。その組み合わせは冗談かと思ってしまうが実際登録されているのだから仕方が無い。

「どうする？」

「こつちが顔を知られていないなら通り過ぎてから尾行するのが常套でしょ」

「了解。買い物は諦めるしかないわね」

アタシ達はそのままの速度で歩き続け、件の金髪がアタシの視界にも入ってくるが視線も合わさずにそのまま通り過ぎる。

「お待ちなさい。そこのお二人さん」

直前に両手を広げて通せんぼされた。

「何？」

アタシは露骨に不機嫌な顔と声を向けるがゴールドは全く意に返さず視線をアタシ達に向けてくる。

「本戦の参加者ね？上手く誤魔化しているみたいだけど私の目は誤魔化せなくてよ」

正直、心の中で舌打ちしたが顔には出さなかった。

「何の話？アタシ達忙しいんだけど」

「止めておきましょう。どうやらハツタリで引き止めた訳ではなさそうよ」

アタシは尚も誤魔化そうとしたがテンペストに遮られる。アタシは更に舌打ちしたくなったがテンペストがそういうからには本当に確信されているという事だろう。

「場所を変えますわ。異存は無いですね？」

「敵にのこのこ着いていくほど素直じゃない。場所はこっちで指定させて貰うよ」

「ええ。よろしくてよ」

いちいち気取った動作と喋り方で癪に障る女だ。アタシはテンペストに視線を送るとテンペストは頷き彼女が先導して歩き始めた。

テンペストが案内したのは海沿いの人気の無い公園付近の広場だった。

「良い場所ね。ここなら誰かに目撃される心配もなさそうだし遠慮なしで能力を使える広さもあるし」

無論、それはあたし達にも適応される。だからここを選んだのだ。

「さて。お二人さん覚悟は宜しいですか？」

「その前にアタシ達が一般人かもとは考えないの？」

「ありえませんが。この私が言っているのですから間違いありません」
「大した自信なこと」

実際、間違いないのだから文句を言う筋合いではないのだが。

「恐らく探査系の能力ですね。彼女の言動には間違いなく確信があります」

「そついう貴女も探査系の能力みたいね。なかなかの感度をお持ちだわ」

「？」

テンペストは普通なら聞こえないような小声で話したのにあっさり話に食いついてきた。という事はつまり。

「耳か」

「少々無駄話が過ぎたようですね」

どうやら凶星のようだ。どんな能力かは知らないが彼女はかなり広範囲、高密度の音を拾う事が出来る能力らしい。そうであるならばアタシ達の事がばれたのも納得がいく。テンペストが彼女を発見した時の『声』を拾われていたのだ。

あの人ごみの騒音の中でこちらの声を正確に拾うなど信じられないが、それを言ったらテンペストの視覚も疑わなくてはならない。だから事実を疑うより優秀な探査系の能力者であると納得した方が合理的だった。

「さて。それでは早速始めましょうか」

そう言うって何の意味があるのか懐から扇子を取り出して広げる。

アタシは正直呆れて肩を竦めたのだが。

「マイクが仕込んでありますね。恐らくあれで味方と連絡を取る心積もりです」

「！」

テンペストがそつと小声でアタシに情報を流してくれた。流してくれたのは良いのだが。

「そういえば聴覚が優れていたのでしたね。失敗しました」

「死角になるように広げたつもりでしたが、凄い『目』を持っているみたいね」

「・・・」

折角の探査能力のアドバンテージを消されてしまった。テンペストもそうだが相手も並みの探査能力者ではないらしい。

「本来であれば、このまま戦いに突入するつもりでしたが気が変わりました。あなた方私達とチームを組む気はありませんか？」

「どんな心変わりだ、それは？」

「赤毛の貴女の方は分かりませんが、彼女の方はかなりの探査能力者である事は明白です。優秀な者と手を組みたいと思うのは生き残る上で当然の話ではありませんか？」

まあ、道理といえば道理なのだが。

「それってあんた一人で決めちゃって良い事な訳？」

「それは・・・確かにその通りですね。『バイブル』！」

「ここに」

「うお!？」

金髪女が呼ぶと唐突に　本当に唐突にメイド服を着た黒髪の女が現れたのでアタシは流石に面食らった。テンペストの方を見ると同じように驚いていたので本当に唐突に現れたのだろう。

「私達二人と貴女方二人。手を組んでも生き残り限界数の5人を超過しませんので悪くない条件だと思いますが？」

「ふむ」

確かに金髪女の言う事は道理だし魅力的な条件ではある。ちらりとテンペストの方を見ると視線で「貴方に任せます」と言いたげだった。

「確かに手を組むのは悪くない意見だわ」

「では・・・」

「ただし!こちらからも一つだけ条件をつけさせて貰う」

こちらの肯定的な意見で金髪女の気が一瞬緩んだ隙にガツンとカウンターの言葉を叩き込む。

「条件とは？」

「アタシが提示する条件は一つだけ。真名を交換する事よ」
『な!?!』

相手　金髪とメイドから驚愕が漏れる。当然といえば当然だ。今日初めて会った相手に真名を明かせと言っているのだから。

「貴女、正気なの？」

「さて。どうかかな？」

「信じられない。一体どんな心臓しているのよ」

どうやらその耳でアタシの心拍を調べたようだが今のアタシは普通の臆病が反転して度胸の塊だ。この程度の事では心拍数はいささかも乱れない。

「この条件を満たさない限り、アタシは誰にも背中を預ける気はない」

「そう。残念だわ。バイブル！」

メイドが動いた瞬間、アタシも同時に動いていた。メイドが何処からともなく取り出した日本刀に対抗する為、『リハース エッチ反転凶刃』を服の中から引き抜く！

メイドの能力は不明だが能力名は『バイブル』。そして分かっている事はテンペストにすら気付かせないほどの隠密性を持ち合わせている事。

反転して気が強くなっているとは言え後手に回っては不利。そう判断してアタシは先制をとって鎖を振りかざす！

「ぶっ」

アツサリ避けられた上、嘲笑を持って刀が横薙ぎに振るわれアタシの首を持っていく。軌道を描いて通り過ぎていく。要するに外れ。

「・・・」

瞬時にメイドの間合いから離れたアタシを見て彼女は怪訝な顔をする。当然だろう。普通ならあり得ない態勢であり得ない速度で後退したのだから。

タネはスケート場で散財しながら習得した靴の裏の摩擦係数をゼ口にする高速移動だ。

そのアタシを見てメイドは瞬時にアタシから視線を外した。メイドの視線の先に居るのは　テンペスト！？

今度はメイドが瞬時にテンペストとの間合いを詰めると振り上げた刀を真上から降り下ろす！

その刀が乾いた音を立ててアタシの『リハース エッチ反転凶刃』の鎖に止められる。高速移動でテンペストの前に立ち、鎖の両端を両手で掴んで刀

を受け止めた形になるのだが。

「な!?!」

アタシとメイド、両方から驚愕の声が漏れる。

アタシは『リバースエッチ反転凶刃』に触れているにも拘らず捻じ切れない刀に驚き。

「斬れない、だと!?!」

メイドはアタシの鎖を切断出来なかった事に驚いているらしかった。

「どうやら似たような性質の武器みたいね」

「く!」

アタシは受け止めていた刀を鎖で跳ね上げて間合いを離す。

「さつきからあの刀を見ているのですが目がチカチカします。どうやら高速で振動しているみたいですね」

「なるほど。聖書ではなくハイフレーション高振動の『バイブルV i b r』だった訳ね」

それならアタシの『リバースエッチ反転凶刃』で捻じ切れなかった訳も納得出来る。アタシの『リバースエッチ反転凶刃』はあくまで『触れた物』を限定で捻じ切る鎖だ。対してあの刀は高振動によって刀から発せられる高周波のようなもので切断する類の物なのだろう。だからアタシの鎖に接触したのは刀から発せられる高周波のみでアタシの鎖はその『高周波を捻じ切って弾いていた』のだ。刀の方も実際切れ味を保証する高周波を捻じ切られていた訳だから切れる訳が無い。

「おのれ!」

その事実を看破されたのはよほど頭に着たのかメイドとは思えない激昂ぶりを見せると刀を腰だめに構え。

「刀に例の高振動が高密度で集束しています。私の勘ですが飛び道具として高振動を打ち出す可能性があります」

「ち!」

テンペストの助言を元にアタシは『リバースコア反転結界』の準備を急ぐ。

「来ます!」

「間に合え

!!!」

テンペストを背後に庇いながらアタシは選択した計算式を即座に前面に展開する。瞬間、メイドの刀が横薙ぎに振るわれアタシの周囲にあつた銅像が粉々になつて吹き飛ぶ！だがアタシは無傷、更に反射に成功した超振動がメイドに跳ね返り。 。
「ふっ！」

刀の一振りで相殺された。

「振動を振動で相殺されてしまったようですね。冷静な判断力と驚異的な反射神経です」

「激昂してたくせに随分立ち直り早いじゃない」

「良い性格をしているみたいですね」

『アタシの後ろに隠れて顔色一つ変えなかつたあんたが言うか？』
と思つたが余計な事は言わないで置いた。

「想像していたより随分手強いじゃない」

「その言葉、そつくりそのままお返ししますわ」

テンペストと同じくメイドの背後からアドバイスを繰り返していた金髪女が答える。

「でも・・・」

そう『でも』だ。アタシはスカートのポケットからコインを取り出すと背後のテンペストの指示に従つて胸元の位置に固定する。そしてそつと指を離した。

「これまでよ！！」

戦闘の最中、既に陣取つていた東位置に固定したコインにメイドと金髪が迫る！

「くー！」

メイドは超振動の刀で10円玉を受け止めようとするが 無駄！

「な！？」

当然のように刀がへし折れた瞬間、アタシは勝利を確信して 。
「え？」

驚愕する。

アタシが固定した10円玉は確かにメイドの刀をへし折り、更に

メイドを貫く軌道を確保していた。にも拘らずメイドは背後の金髪を抱きかかえ、自身も頬を掠らせるだけで10円玉を回避してしまつた。

「嘘」

「恐ろしい反射神経ですね。あの至近距離であの高速のコインを回避するなんて」

正直、その事実が信じられなかった。あの『イージス』ですら圧倒した『反転滑走』が回避という形であれ破られたのだ。絶対の自信を持っていたアタシは驚きを隠せなかった。

「なんとという攻撃能力。バイブルがここまで追いつめられるなんて向こうもこちらと同じように驚いているようだが全然嬉しくない。アタシはスカートのポケットから更にコインを取り出して 迷う。普通に撃つたらこの距離では確実に回避されてしまいですね」

「・・・」

『反転滑走』は『反転結界』よりも更に消耗が激しい。Lv5の今『反転結界』なら10回近く展開出来るのに対して『反転滑走』は3回が限度だ。摩擦係数を反転し、その上で地球の自転を反転するという2重の能力使用なのだから仕方ない。

一応手はある。

『反転滑走』で摩擦係数をゼロにするのは周囲に被害を出さない為と命中精度を高める為だ。周囲に人が居ない今の状況なら摩擦係数を反転させずに使えば命中はしなくても広範囲に恐ろしい衝撃波を発生させられる筈だ。それならどんなに上手く回避しても必ず倒せる筈だ。

「・・・」

テンペストがアタシの肩に手を乗せてぎゅつとしがみついて来る。そう。この手は最大の攻撃法であるがゆえに最大の自爆法でもある。固定地点の背後であるこちらは極力被害は小さくなる筈だが、どれほどの衝撃が来るのか全く分からないのだ。発動と同時に伏せても恐らく無傷という訳には行かない。最悪ズタズタに切り裂かれ

る事も考えられる。

「迷っているみたいね」

金髪に言われる筋合いはないが、それは迷う。まさかここにきてこれほどの強敵に出会ってしまうとは。

「あ」

と、ふと思いついた。確かにこの二人は強敵だ。このまま戦えばどちらも唯ではすまないのは目に見えている。ならば。なるほど」

アタシの鼓動からアタシの考えを読んだのか金髪　ゴールドは納得してメイドの影から姿を表した。

「そういう事ですか」

同じくテンペストもアタシの背後から側面に移動する。

「？」

唯一人、メイドだけが困惑した顔でアタシ達3人をキョトンとして見ていた。

「つまり、仲間にするのは諦めるけど共同戦線を張る事には問題ない訳ですね？」

「そ。折角強いワンペアが二つ出来たんだからフォーカードにせずツーパーのまま手札に纏めれば良い訳」

つまりアタシ達とゴールド達は別々に行動するけれど連絡は取り合ってお互い潰しあうのを避ければいい。幸い最初にゴールドが言ったとおり生き残り枠には余裕があるのだから。

「これは思った以上に有効な手からも知れませぬ。戦力は一気に倍になった上に情報力まで倍になるのですから」

「更に一つのペアで対抗出来ないほど強力な敵が現れても・・・」
「二班で対処すれば恐らく何とかなるでしょう」

協議は上手く纏まりつつある。アタシとしても危ない賭けに出なくて済んで胸を撫で下ろす。

「さて。そうと決まれば最低限の礼儀として自己紹介しておきまし

よう。既にご存知かと思いますが私はゴールド、彼女はバイブルです」

「ああ。そっか」

アタシもテンペストも姿を変えたままだったのだ。

「^{リバー}反転・^{オウ}解除」

「私も偽装を解きます」

部屋の外で元の姿に戻るの久しぶりだが、この際文句を言える立場でもない。二人で偽装を解くと当然ながら 特に俺の方に視線を向けて二人は驚いていた。

「なんとまあ。殿方だったとは」

「能力名『リバー』だ」

「テンペストです」

お互い自己紹介を終え、とりあえず一段落だった。

第五章

アタシもテンペストも表ではあまり素顔を晒したくないので既に表向きの顔に戻っていた。その上で4人で会議を行う。

「携帯の番号も交換したし、これで連絡を取り合う手段は確立出来ましたわね」

「基本はメールでやり取りして通話は緊急時のみに行くべきだな。そっちの耳じゃこっちの状況全部把握されちまうしな」

「構いませんわ」

大体の打ち合わせを終えて一段落ついたところで、ふとゴールドが思いついたように発言して来た。

「そうでした。現在の停滞した状況の原因は決戦開始初日に3人の能力者が倒された事が発端です。その能力者達も近くに居るかもしれませんからくれぐれも気をつけた方が宜しいですよ」

「あ」

ゴールドは親切心で忠告してくれたのだろうが、そういえばそれを話すのを忘れていた。

「悪い。それアタシ達だわ」

「かなり前の出来事なので忘れかけていましたね」

アタシもテンペストもアハ八と苦笑いで肩を竦める。が、ゴールドはあまり驚いていなかった。

「まあ、そういう可能性もあるとは思っておりまして」
不機嫌っぽい声だったが。

「だから悪かったって。回収した腕輪で良ければやるから機嫌直せよ」

「そういえばずっと仕舞ったままでしたね。20Lv分余っていますので良ければ差し上げますよ」

「貴女方で使えばよろしいではありませんか」

「私達とは相性の悪い能力ばかりでしたので」

「ふむ」

ゴールドは少しだけ考える。

「では最後にお互いの拠点を公開して幕としましょう。腕輪も持ち歩いている訳ではないのでしょうか？」

「そうだな」

とりあえず最初にウチの拠点到案内する事にした。

「で。これが回収した腕輪な訳」

俺は合計20Lv分の6つの腕輪をゴールドとバイブルに公開する。

「ふむ」

二人は両腕をまくり腕輪を晒すと二人とも右腕はLv5、左腕はゴールドがLv2でバイブルがLv1だった。

「そっちは何の能力なんだ？」

「私はシールド系の能力です。支援に徹する能力上、盾はあって損はありませんから」

「私はジャドーです。探査の能力に掛からない優れた隠密性を持つ能力なのですが本当に隠れるだけの能力です。攻撃は元より防御も出来なくなります」

「へ〜」

バイブルは兎も角、ゴールドにはイージスの腕輪があれば得だったかもしれない。まあイージス戦に居なかった以上付け替えは無理だろうが。

「まあ、兎も角やるよ」

「ありがたく頂戴いたします」

二人は俺から受け取った腕輪をそれぞれ左腕に足してLv5まで上昇させた。

「さて。それじゃ今度はお前らの拠点を見学に行くとするか」

「ええ。ご案内しましょう」

アタシ達は二人について二人の拠点へと向かう事にした。

「へー。アタシ達と同じマンション暮らしなんだ。お嬢とメイドって感じだったからてつきりお屋敷にでも住んでるのかと思ってたわ」「ここは本戦の間、借り受けているだけで普段は屋敷に住んでいますよ」

「あっそ」

金って奴はあるところにはあるものらしい。

「しっかし『お嬢とメイド』と共闘する事になるとは思わなかったわね」

ゴールド達の拠点からの帰り道、マンション下でアタシはテンペストに話題を向けてみたのだが。

「あの。ここでそのような話は避けた方が良いと思うのですが」「何で？」

疑問を出したアタシの携帯にメールが届く。何かと見てみたら『聞こえていますよ』との事。

「あー。この距離じゃ十分聴覚範囲内な訳ね」

「ちなみに私も十分視覚範囲内です。彼女達の仕草から表情まで全て見えます」

再度メールが届き『プライバシーの侵害です』と書かれていた。

「それはお互い様でしょう。あら可愛らしい下着だこと。あ。カーテンを閉められました」

「・・・」

余計な事は言わない事にした。

『こちら西地区。状況に変化なし』

『こちら東地区。同じく変化なし』

ゴールド達と組んでから数日。俺達は毎日町を巡回しているが今の所全く成果なし。折角素顔まで晒して歩いて自ら囮になっているというのに何処からもアプローチがない。

「まあ、いつ仕掛けても良いバトルロワイヤルだけど、こんなに長引く物なのか？」

「ここまで膠着するのは私を知る記録でも珍しいケースだと思いません。今までも何度か本戦が行われていると話だけは聞いた事がありますが大体長くても40日前後で決着がついていたという話ですから」

「なんか随分曖昧な話し方？」

「私は監視者と言っても前本戦を棄権して保護された故の『仮監視者』という立場でしたから。今だから言いますが貴方と組めなければ本戦参加を上にした承させる事も出来なかったでしょう」

「何で俺？」

「私が貴方の参加した予選の監視員だったからです。貴方の能力を知る私が貴方以外の者と組むのは貴方にとってフェアではありませんからね」

「ふ〜ん」

今更だがテンペストにも色々複雑な事情があるらしかった。

「そういう訳で私は大した情報は持っていません。まあ大した情報を持っていけば本戦参加など出来ませんでしたけど」

「そんな警戒しなくても根掘り葉掘り聞いたりしないって」

「相棒に理解があって嬉しいわ」

「へいへい」

それにしても結局その日も空振りだった。

それから更に何日かが過ぎ去り、本戦開始から40日が経とうと
していた日に入って。

「む？」

俺の携帯に連絡が入った。ゴールド達じゃない。本戦の監視者からのメール。

「能力名『カシス』と『エリユク』が撃破？」

「ここに着てやっと進展があったみたいね」

「ああ。とりあえず×マークをつけておこう」

俺は登録書を捲り『カシス』と『エリユク』を探し 探すまでもなく最初に捲ったページに二人を発見して何だか嫌な予感がした。

翌日。更に二人の能力者が倒されたと連絡が入った。

それを確認してから俺はゴールド達と連絡と取り緊急招集を開く事にした。

「やっと進展があつたかと思えば何なのでしょう、この事態？」

「どう考えても普通じゃないな」

昨日倒された能力者は登録書を開いて最初に出てくる二人。そして今日倒されたのは次のページの二人だ。

「考えられる可能性は？」

「一つは全部偶然という可能性。俺達が心配すぎという可能性だ」

「ありえないですね」

「俺もそう思う」

こんな偶然があつてたまるものか。

「次の可能性は今までの準備期間の使い方の違いだ。俺達は自分達の能力の拡大や対策を練る事に期間を費やしてきたが、こいつは相手の居場所や能力を徹底的に調べて順番に撃破している可能性」

「まあ、ありえなくはないでしょうね」

勿論、集まった三人は渋い顔をしていた。

「まあ、ハッキリ言ってこんなのは優等生の甘ちゃんくらいしか信じやしないけどな」

「でしょうね。そんな面倒で無意味な手順を踏んだ能力者が居るといふよりもっと合理的な回答があるのですから」

そう。俺達は既にその『回答』に行き着いている。即ち。

「膠着した状況に焦れた主催者側が『刺客』を送り込み、順番に始末する事で参加者の尻に火をつけている」

「可能性として、それが最も高いでしょうね」

「こうなれば参加者側は嫌でも動く。膠着状態を打開したかった俺達にとつては願ってもない展開になれば良かったんだが・・・」

ここで問題が一つある。

俺やテンペスト、そしてバイブルは登録書の比較的後ろの方に登録されているのだが。

「このままのペースで行けば後3日で私が始末される計算になりませんね」

ゴールドだけは比較的前に登録されてしまっている。協定がある以上面倒な戦いは避けられないだろう。

対策は練りに練られた。なんとと言っても相手は未知数の刺客として送り込まれた能力者だ。

「別に無理に協力を要請するつもりはありません。貴方方とはあくまで潰しあうのが悪いという理由で組んだ協定関係ですから」

「阿呆な事言っていないでさっさと対策を立てる。今お前を見捨てても明日は我が身だってお前だつて理解出来ているだろうが。早いか遅いかの違いなんてこの際関係ない」

そう。今なら4人で対応出来るがゴールドを見捨てた場合最悪2人で対応しなくてはならなくなるのだ。それよりはゴールドと協定関係の内に4人で迎え撃つた方が生きる可能性が高い。

「ご助力・・・感謝します」

俺の合理的な『理由』にも関わらずゴールドはちよつと涙ぐんでいる。まあ、まるつきり情抜きという訳でもないので気持ちは分らないでもない。

「とりあえず最初の問題は・・・」

俺は携帯のメールを開いて、次に登録書を開く。

「『刺客』の事実気付いた参加者が動き出して順番が早まる可能

性が高いという事だな」

登録書の×マークは昨日から少しずつ増えていつている。幸い、まだゴールドの前の登録者は撃破されていないが、それも想定して置くべきだろう。

「予定では2日後になっているが最悪明日の襲撃も予想しておくべきだな」

「それにしても不気味な刺客ですわね。登録書の最初に記載されている者でも組んでいる能力者は居るでしょうに、ここまで順番に倒しているという事は組んでいる能力者は完全に無視しているという事ですもの」

「圧倒的って事だろうな。俺達が使える能力はLv5が二つまでだが刺客は制限がないのかもしれない」

「本当に主催者側の刺客というなら、その可能性も大いにありえますわ」

相手は反則的な能力者。こちらも制限上ではかなり頼もしい能力者が4人も揃っていると言うのに今は何故か心強さが感じられなかった。

決戦当日。

ゴールドの前に居た能力者は迎え撃つ事より逃げる事を選んでい
たのか他の参加者に撃破される事なく予定通り刺客に倒された。

「まさか、またここにくる事になるとはね」

「迎撃に適した場所というのは限られていますからな」

俺達が迎撃に選んだ場所は以前ゴールド達と戦った公園の横にある広場だった。今日も相変わらず人気が無く戦いには適していたのだが。

「出来るなら誰も着てくれない事が理想的だったんだがな」

「現実というものはそう甘く出来ていないようですわね」

俺達の元へユツクリと一人の青年がやってきた。

「やあ、こんにちは」

青年の言葉は軽く、この場に漂う緊張感には違和感がある挨拶だった。だが勿論俺達はそんな軽い雰囲気には惑わされたりしなかったし、何より。

「やはり貴方が『刺客』だったのですね」

「やあテンペスト。久しぶりだね」

元監視者のテンペストと顔見知りな時点で既に完全なクロだった。「知り合いか？」

「ええ。私は予選の審判といった下つ端でしたが彼は観戦者として私の上官という立場に居た人です。残念ながらどのような能力を持つてどのくらいの強さを持つているのかは分かりませんが」

つまり俺達の考えが完全に正しかったと証明されてしまった訳だ。

「さて。僕の目的は既にご存知のようだけど一応説明させて貰おう。僕は本戦で膠着状態に陥った今の状況を進展させる為の『処刑人』^{エクス}。僕の標的は本戦で全く戦果を上げていない者全員だ。そして今回の標的は君だ『ゴールド』」

「でしょうね。余りにも分かりやすいやり方だったので対策は十分練らせて貰いましたわ」

「ふむ。僕の目的はあくまでゴールドだ。それ以外の者、特にリバースとテンペストは既に戦果をあげた僕の標的ではない能力者だ。

出来れば邪魔をして欲しくないのだけど、引いてはくれないかな？」

俺達に哀願するような視線を送ってくるエクス。

「まあ、条件次第では要求を飲まないでもないけどな」

それに対して俺はエクスに近寄りながら肩を竦めて言った。

「それは嬉しいな。特に君は上層部から結構期待されている新人だからここで処刑するのは惜しいと思っていたんだ。それで条件とは何かな？」

「何、簡単な事だ」

俺は右手をエク스에差し出して握っていた物からそっと指を離し

た。

「お前が死んだらお前の邪魔はしないで置いてやるよ！」

至近距離での『^{リバースエア}反転滑走』を放って俺は即座にエクスから離れ、
テンペストの横に場所を取る。

「なかなか的確な判断だね。至近距離という事もあるだろうがLv
5で僕にここまでダメージを与えるとはね」

そう言いつつもエクスの傷は『^{リバースエア}反転滑走』を受け止めた左手から
流れる血液のみ。だがここで注目するべきなのは至近距離で『^{リバース}反転
^{エア}滑走』を止めたエクス本人ではなく。

「使用されたコインが落ちている。『^{リバースエア}反転滑走』はリバースが解除
しない限り地球の自転から切り離されたままの筈なのに、それが落
ちたという事は……」

「能力を『^{キャンセル}無効化』する能力者か」

「でも、それだけじゃ説明がつかない。『^{リバースエア}反転滑走』は無効化され
ても慣性の法則でかなりの速度で飛ぶ筈。それを受け止めてあの程
度のダメージという事は……」

「物理的な攻撃に対しても何らかの強力な防御法を持っているとい
う事」

人間が最も恐れる物とは『未知』に他ならない。だから俺達は声
に出してその『未知』を解き明かしていく。解き明かすと同時に攻
略法を見つける為。

「やれやれ。たったの一撃で随分分析されてしまったな。本当にや
りにくいよ、君達は」

それでもエクスは余裕を崩さない。

「さて。それじゃお喋りはこの位にして、そろそろ……」

「^{リバース}Reverse……」

「始めようか！」

「^{スタート}Start！」

俺が女へと反転すると同時に戦闘が開始された！

「反転凶刃！」
リバース エッジ

「振動秦刀！」
バイブル レザー

まず先制を勤めるのは前衛であるアタシとバイブル。捻じ切る鎖と切断する刀で同時攻撃を仕掛け。

「残念。この程度なら避けるまでもないよ」
全く通用しなかった。

能力を無効にされている以上アタシ達の攻撃は唯の鎖と刀だ。それも『反転滑走』の余波にすら及ばない為効かないのは分かりきった結果だった。

だから重要なのはアタシが前、バイブルが後ろという形式を取る事。

「例え効かなくても！」
「む」

アタシは反転させた鎖をエクスの足に向けて放ち、鎖を巻きつける。本来ならこれで完全に足を捻じ切れるのだが、今は足止めが精一杯。だが足止めが目的なら十分！

「超振動波！」
ハイバイブレーション

足止めをして頭を下げたアタシの後ろからバイブルが刀に高密度に集めた高振動を放つ！例え能力を無効にされたとしても能力で作りに出された高振動までは防げない筈！

「なかなか良い連携攻撃だ。少しは痛かったよ」
「な！？」

銅像を一瞬で粉々にするような振動波を受けて顔色一つ変えやがらなかった。

「とりあえず痛かったから君達にペナルティだ」
「え？」

唐突に、本当に唐突にバイブルの持っていた刀が消える。そしていつの間にかエクスの手に刀が握られており、それを振りあげたエクスは。

「ち！」

転がって逃げるアタシには目もくれず『リバース エッチ反転凶刃』の鎖を刀で切断した。その上で持っていた刀も素手でへし折る。

「君達だけ武器を持っているのは不公平だからね。少し対等の条件を整えさせてもらったよ」

素手にされてしまったアタシとバイブルは今まで背後で静観していたテンペストとゴールドを振り返る。2人が戦線に加わらないのはアタシ達の攻撃を観察してエクスの攻略法を探す為だったのだが。

「ごめんなさい。攻撃を凌いでいる手段は硬化している訳でもシールドを張っている訳でもない事は分かるのだけど、実際どうやって防いでいるのか見当も付かないわ」

「私も同じです。心拍数や筋肉の動きも注意して聞いていたけど変化なし。攻撃を受ける瞬間ですら何も変化しなかったわ」

つまり何もわからなかったという事か。今の所唯一通用したのは不意打ちのように使用した『リバース エア反転滑走』のみ。それでも受け止めた腕に傷を付けたただけなのだから。

「？」

ふと疑問が頭を走り抜ける。傷なんか付いていただけだろうか？確かに血を流していたのを確認はしたが傷なんて何処にも見当たらない。整理して考えてみると、探査系の2人はどうやって『防いでいる』のか分からないと言った。そしてアタシの『リバース エア反転滑走』を片手で受け止めて血を流したが傷は存在しなかった。という事は。

「治癒能力か！」

エクスは攻撃を防いでいるのではなく攻撃を受けても即座に回復する能力の持ち主だと考えれば納得が行く。探査系の2人が何も分からなかったのも無理はない。エクスは攻撃を防いでなどいないのだから『防ぐ手段』を追求しても分かるわけがない。

「あらら。バレちゃったか」

アタシの言葉にエクスはアッサリとその事実を認めた。

「ズバリご名答。僕の能力は『キャンセルリカバー』。『無効化』の能力は後

付けでこつちがメインの能力なんだ」

「は！随分親切な事だな。自分の能力をペラペラ公開して良いのか？」

「構わないだろう。だって君達の最大の攻撃は『リバースエア反転滑走』で、それは僕に通用しなかったからね」

「・・・」

確かにその通りだ。『リバースエア反転滑走』で大ダメージを受けた為か血を見せはしたが実際に傷は即座に修復された。能力なしで『リバースエア反転滑走』以上の攻撃力を叩き込む手段となると。

「・・・」

アタシは無言でテンペストに視線を送ると、テンペストは同じく無言でコクリと頷いてアタシの傍に着てくれた。

「ん？まだ何か手段があるのかな？」

「これが通用しなかったらアタシも潔く諦める。その時はアタシの首でもゴールドの首でも好きに持っていきな」

「ほお」

結局の所、この男の意思なのか上の命令なのか知らないがアタシ達は期待されている。アタシ達に好きに攻撃させて自分は全く反撃してこないのが良い証拠だ。だから、この場で生き残る為には『奴ら』の期待に答えるしか手はなく、更にエクスを倒すとなると期待以上の真価を發揮するしかない。

「やるぞ！テンペスト」

「ええ」

テンペストが後ろからアタシの身体に抱き付いてくる。その上でテンペストは視線をエクスに向けて。

「クローズ」

アタシ達を中心に暗闇が発生してエクスを含むアタシ達を取り囲む。

「まさか、この暗闇に乗じて逃げようなんて作戦じゃないだろうね？」

言葉とは裏腹にエクスは動く気配も見せない。アタシ達が何をやるのか見届ける気満々なのだ。

テンペストが作り出した暗闇がエクスの『無効化』^{キャンセル}によって晴れた時、暗闇を作り出す時と違っている事は一つだけ。

「？」

アタシとテンペストはエクスの直ぐ傍に移動していたと言う事実だけ。

「こんなに近くにきて、一体何を・・・」

『リバース
Reverse・・・』

エクスを無視してアタシ達は声を張り上げながら

『テンペスト
Tempest!!』

アタシ達を中心に竜巻を作り上げた！

「な!？」

流石に驚愕を漏らすエクス。当然だ、これほど巨大な竜巻を人為的に作り上げる事など普通に考えればあり得ない事実である以上に。

「くあああ　!!!」

エクスに防御手段が無い以上、エクスは成す術も無く竜巻に巻き込まれて上空へと巻き上げられる！

アタシ達の背後ではゴールドが歯を食いしばって前面にシールドを展開、更にバイブルが周囲に振動波の結界を張って耐えていた。

はつきり言ってこれはアタシとテンペストの切り札中の切り札。

テンペストの情報処理をフルに活用してアタシに計算式と大気の状態をリアルタイムで伝え、アタシが受け取った情報を元に周囲全体に対して反転現象を実行する。勿論並みの能力行使ではない。2人とも限界ギリギリまで振り絞って能力を酷使用する諸刃の剣だ。

「かは!」

「う!」

しかも切り札『リバース
Reverse　テンペスト』を使用して竜巻を作り上げられる時間は最大でも10秒程度。

だが巻き上げられたエクスはかなりの高度まで上昇して　。

「ごはあああ　　！！！」

物凄い回転をつけながらコンクリートで出来た地面をドリルのように削りながら数メートルに渡って掘り進め、びくびくと痙攣して倒れていた。

「自分でやっておいてあり得ない威力だと思っただが、どちらかと言っの『これ』を喰らってまだ生きていると言っ方がなんかあり得ないな」

力を使い尽くしてしまい、既に女に反転している事も出来ずに男に戻った俺は落ちていたバイブルの折れた刀を拾い上げてエクスの埋まった穴へと飛び降りる。

「こ、これは、参ったね。ダメージが、大きすぎて、治癒が、追いつかないや。こんなに、痛いのも、本当に、久しぶり、だよ」

「直ぐに楽にしてやる」

「あはは・・・がふ！」

心臓の辺りに折れた刀を突き刺したのだが、まだピクピク動いている。

「しぶといな」

「か、身体じゃなくて、腕輪をつけた、腕を、狙ってくれないか？物理的に、切断すれば、能力は、切れる筈だから」

「なるほど」

基本的に能力者にとって腕輪をつけている腕が急所になる訳か。

「腕輪は、あくまで、能力の、補助装置と、リミッターの役割を、担っているのだけど、僕の場合、腕輪をつけていると、自動的に能力を発動されて、力尽きるまで、死ねないんだ。これは、上に連中に着けられた、鎖なんだよ」

「そんな事は聞いていないが、丁度良いので一つ質問だ。お前が死んだら次はどうなる？」

「次の、処刑人が、来るだけさ。けど、ゴールドは、大丈夫、だろ。う。なんと言っても、僕を倒した、功績が残るから、ね」

「あつそ」

俺は心臓から折れた刀を引き抜いてエクス腕に突き刺す！

「ぐー！」

痛がるエクスを無視して更に何度も突き刺す。

「作業の最中だが、僕の腕輪は、君に上げるよ。面白い事が、起こるかもね」

「・・・」

もう答える気にもなれず俺は無言でザクザクとエクスの腕を突き刺し。

「じふー！」

腕が切り離されると同時にエクスは血を吐いて絶命した。

「・・・」

考えてみたら男で人を殺したのは初めての経験だったと思ひ出す。

エピソード

エクスの言ったとおりエクスが死んだ後にも処刑人が着た様だが、ゴールドが対象外になったのも事実らしく、俺達は唯時間が過ぎるのを待つだけで良かった。

エクスといえば俺は彼の最後の言葉通り腕輪を彼から回収した。エクスの腕輪は今まで見た事も無いような赤い色をしていた。俺はそれを最初左腕に着けようと思ったのだが、ふと思い直して右腕に着けてみた。

エクスの腕輪は他の腕輪と同じように腕に着けると同時に元から着けていた腕輪と一つになったのだが、色は元の青のまま何も変わらなかった。

あくまで外面的には。

本来なら5人生き残れる筈の本戦だったのだが功績をあげなかった他の能力者たちは粗方エクスの後任の処刑人に処理されてしまったのか生き残り、つまり優勝者は俺とテンペストとゴールドとバィブルだけだった。

その俺達4人は今回の主催者の本部とやらへ連れて行かれ、表彰を受けた。

これだけの人間を殺すような戦いを強いられた割には普通の対応をされ、普通に祝福された。

結局、最後まで何の為の戦いだったのかを説明されないまま俺達は一つの部屋へと案内されて。

腕輪を外され。
記憶を消され。
日常に戻された。

俺は今、普通に朝起きて、普通に学校へ行き、普通に帰って寝る生活を送っていた。

時々、何処かで見た気がするOLの人と擦れ違ったり、金髪の人と擦れ違ったり、メイドの人と擦れ違ったりしたけれど気にしない事にした。

今日もいつもどおり朝起きて、いつもどおり学校へ行って、いつもどおり帰って寝る。

だからきつと誰にもバレていない筈だ。
俺が記憶を失っていないなんて事は。

あの部屋に入った時、直ぐに扉を閉じられ閉じ込められて説明を受けた。

これから俺達は腕輪を外され、記憶を消されて、日常に戻される事を。

勿論、俺達は抵抗した。

部屋の扉や壁を破る為、ありったけの能力を行使したが部屋の扉は『イージス』並みの能力遮断なのか俺の『反転滑走』^{リバースエア}でもビクともしなかった。

精一杯の抵抗の末、部屋の全域から音波のような物を放たれ装着していた腕輪は音も無く崩れ去った。同時に意識が遠くなり 気付いたら日常に戻っていた。

というのが恐らく他の3人の認識なのだろう。

俺が記憶を失わなかったきっかけは勿論エクスノ残した腕輪だ。

エクスの腕輪は俺に力を与える物ではなかったが、エクスの記憶を残してくれた。エクスの意識が俺に混じるような物ではなく、エクスの記憶を腕輪から引き上げられるような感じと言えば良いのだろうか？

だから当然本部に連れて行かれた自分がどうなるのか分かっていない。

だから対策も出来た。

あの部屋で腕輪が壊されるのは避ける事が出来ない絶対の事実だった。だが記憶を失う事は俺次第でどうにかなる。

本来なら腕輪を奪われた時点で本戦の生き残り程度では能力を行使する事は出来なくなるがエクスが最後に言った言葉。

『腕輪は唯の補助装置でありリミッター』だという事。

だから、その気になれば腕輪無しでも能力を行使出来るのだという事は分かっていた。

無論、行き成り補助装置無しで能力を行使しろと言われても無理な話だ。だが練習期間ならあった。

エクスが倒された次の処刑人がきて他の参加者を皆殺しにする為の時間が。

その間、俺はエクスの知識を元に腕輪を封印、腕輪無しでも能力を行使出来るように少しずつ訓練した。

その結果、初期の反転くらいなら少しの間だけであるが使えるようになっていた。

後は賭けだった。

記憶操作を受ける直前に反転を使用して記憶制御をどこかに跳ね返した。どうやら上手くいったと気付いたのはいつの間にか日常に戻っていた自分に気付いてからだ。

だから俺は今、腕輪無しでも能力が以前のように行使出来るように密かに練習中だ。

俺が一体何をするつもりなのか、何をしたいのかなんて。

前と同じように能力を行使出来るようになってから考えれば良い話だ。

エピソード（後書き）

長々と読んでくださってありがとうございます。
続きもあるので、そちらの方もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5465h/>

反転・遊戯 - リバース・ゲーム -

2010年10月8日14時04分発行